

〔学術論文〕

「愛知用水の久野庄太郎」の悟りと再起

— 一燈園への隠栖と小冊子『光水（旅行）漫録』の誕生 —

Enlightenment and Return of Kuno Shotaro the Father of Aichi Irrigation Project: His Refuge in Itto-en and the Birth of *the Kosui Travel Journal*

柴田 英知
Eichi Shibata

1. はじめに
2. 失脚するまでの「愛知用水の久野庄太郎」
 - 2.1 愛知用水の発起人としての久野庄太郎
 - 2.2 愛知用水史から消えた久野庄太郎
 - 2.3 浜島辰雄による久野庄太郎の顕彰
3. 久野庄太郎の破産と失脚
 - 3.1 久野庄太郎の個人雑誌『躬行者』における告白
 - 3.2 久野庄太郎の会社の倒産
 - 3.3 愛知用水期成運動からの追放
 - 3.4 久野庄太郎の愛知用水の理想と現実
4. 一燈園への隠栖と「大乘愛知用水観」の悟り
 - 4.1 久野庄太郎の一燈園への隠栖
 - 4.2 西田天香と一燈園
 - 4.3 「大乘愛知用水観」の悟りと再起
 - 4.4 一燈園から下山後の久野庄太郎の活動
5. 小冊子『光水（旅行）漫録』の概要
 - 5.1 小冊子『光水（旅行）漫録』に関する先行研究
 - 5.2 小冊子『光水（旅行）漫録』のタイトル一覧
 - 5.3 小冊子『光水（旅行）漫録』の4つのテーマ
6. 小冊子『光水（旅行）漫録』の成立とその役割
 - 6.1 小冊子『光水（旅行）漫録』の誕生と一燈園
 - 6.2 言語化された久野庄太郎の悟り
 - 6.3 啓蒙の手段としての小冊子『光水（旅行）漫録』
 - 6.4 個人雑誌『躬行者』との比較
7. おわりに
8. 謝辞

要旨 2021年9月30日に通水60周年を迎えた愛知用水は、世界銀行の融資を受けた戦後初の地域総合開発事業であり、日本の経済発展を支えた社会基盤のひとつである。近年、望ましい官民連携のあり方を考える参加型プロジェクトとして再評価されるべきとの声もある。

愛知用水の発起人である久野庄太郎は、今日でこそ、愛知用水の生みの親として顕彰されているが、一時期、愛知用水建設推進運動から追放され表舞台から消えていた。その後、久野が愛知臨海工業地帯の誘致や愛知海道（第二東海道）という地域開発事業の推進などに従事したことは、『人間文化研究』第37号の拙稿にて明らかにした。

本稿は、その空白期間、久野の会社倒産による破産や愛知用水の建設推進運動からの追放、西田天香が主宰する一燈園への隠栖と、その後の心境の変化などについて考察する。特に、久野が執筆した小冊子『光水（旅行）漫録』が書かれた経緯と内容に着目する。

考察の結果、1954年に破産してから1961年に免責になるまでの期間は、久野にとって空白の期間ではなかったことが判明した。愛知用水の建設推進運動から追放され、一燈園への隠栖による内省の時期をへて、久野は、愛知用水はつくるだけでは「駄目」で、それを「保全する必要と仕方」が大切であるとの「大乘愛知用水観」に達した。それをふまえて、愛知臨海工業地帯の誘致、三町合併、佐布里池の建設推進などに新たな気持ちで取り組んだ。そのために活用されたのが『光水（旅行）漫録』であった。

存在が確認されている『光水（旅行）漫録』は、16冊のB6、A5あるいはB5判の冊子で、大きく4つのテーマに分類される。久野の「大乘愛知用水観」にもとづく愛知臨海工業地帯の誘致が中心テーマだが、他にも、農業開発地域の視察報告、愛知用水への提言、具体的には地域住民の人心開発や愛知用水公団や愛知用水土地改良区への提言、受益農民向けの営農方法の改善、そして、久野が新たに立ち上げた献体検眼団体である不老会の紹介などが語られた。これらの語りは、久野の内省と農業開発の枠をこえた地域総合開発観の深化であった。

この経験が、1962年10月からの個人雑誌『躬行者』の発行や、愛知海道（第二東海道）の建設推進への伏線となる。今まで言われてきた「愛知用水の久野庄太郎」から大きく「地域総合開発の久野庄太郎」に舵を切ることになったのが、この空白の期間であった。

キーワード：『躬行者』、大乘愛知用水観、西田天香、浜島辰雄、山崎延吉

1. はじめに

第二次世界大戦後の日本で、初の地域総合開発事業となった愛知用水は、2021年9月30日に通水60周年を迎え、水資源機構、愛知県、愛知用水土地改良区などの関係機関により2021年9月25日に「受益地域と水源地域との交流イベント～愛知用水と水源の森～」と題した愛知用水通水60周年記念イベントが開催された¹。小冊子が発行され²、愛知用水WEB博物館などの情報サイト

¹ 水資源機構、2021、愛知用水土地改良区、2021 愛知・豊川用水振興協会、2022 など。

² 愛知用水通水60周年記念事業実行委員会編、2021。

が開設された³。また久野庄太郎が創立して 60 周年を迎えた献体献眼団体の不老会⁴は、その会報で、中日新聞の豊田雄二郎の社説「流れる水は腐らない ― 週のはじめに考える」⁵を紹介している。豊田は、愛知用水から不老会につながる歴史を概観した上で「公共の新しいあり方が問われる今こそ、『民』の熱量を核にして『官』が動く参加型プロジェクトとして再評価されるべきだと思います」⁶と結んでいる。

愛知用水は、世界銀行の借款を受けた国家プロジェクトである⁷。しかし、元々は地元の農民達から建設推進運動が始まった。「日本デンマーク」⁸、「TVA 開発思想」⁹を基盤とする草の根民主主義に支えられ、「水と共に文化を流さん」を合言葉とした官民をあげての文化運動となった。

愛知用水の建設推進には中央や地方の多くの人びとがかかわった。中でも、愛知用水の発願者で愛知県知多半島の篤農家の久野庄太郎（1900-1997）は、私財をなげうって建設推進運動をした「愛知用水の生みの親」¹⁰として知られる。久野は 1948 年 5 月から本格的に愛知用水の建設を推進する農民運動を始めたが、その建設推進運動における貢献と活躍が忘れられていた時期があった。

なぜならば、1954 年 7 月に自身の会社の倒産で破産し、1955 年 2 月に愛知用水期成同盟会から追放されたため、1961 年 3 月に破産が免責されるまで愛知用水の建設推進運動から離れることを余儀なくされたからである。それは、1955 年 10 月に愛知用水公団が設立され愛知用水の建設が本格的に始まった時期と重なる。愛知用水は、1957 年 11 月に調整池である三好池から本格的な建設を開始し、1961 年 5 月に水源となる牧尾ダムの完成、同年 9 月 30 日に全線の通水式がおこなわれ、同年 10 月 28 日に事業を完了した。久野は、破産免責後の通水式には参加した。

ところで、2001 年の愛知用水通水 40 周年をうけ、同年 5 月に NHK のドキュメンタリー番組の『プロジェクト X』で用水建設の経緯が取り上げられた¹¹。『プロジェクト X』では、久野の愛知用水の建設推進運動における活躍だけでなく、久野の破産と用水完成後の不老会という献体献眼団体の設立とその活動が取り上げられた。その後、複数の関連機関の周年誌が編まれた際¹²に、久野の同志として愛知用水の建設推進にかかわった農業技術者の浜島辰雄（1916-2013）が、積極的に久野の功績を公にした。

³ 愛知用水 WEB 博物館 <https://www.water.go.jp/chubu/aitiyosui/webmuseum/>（2022 年 4 月 8 日閲覧）。

⁴ 不老会は、愛知用水の建設工事の殉職者を弔うことから始まった、みずからの遺体を医学研究のために献体するという奉仕運動である。公益財団法人不老会の「ホーム」ページによると「検体検眼で医療の発展・進歩を願う日本最大の地域検体組織」である。1962 年 1 月設立、2012 年に公益財団法人となっている。 <http://furo-kai.or.jp>（2022 年 4 月 8 日閲覧）。

⁵ 豊田雄二郎、2021。

⁶ 不老会、2021、p.6。

⁷ 愛知用水は膨大な先行研究や資料がある。本稿は、愛知用水公団、愛知県編、1969a、1969b、愛知用水土地改良区編、2002、浜島辰雄編著、2005、高崎哲郎、2010、ミツカン水の天然資源の一元管理や、タウンミーティングなどによる草の根民主主義による地域開発思想である。D.E.リリエンソール、和田小六訳、1949、宮本憲一、1973などを参照。

⁸ 「日本デンマーク」は、愛知県が実現していた大正から昭和初期の農村振興の経験である。岡田洋司、1992、安城歴史資料館編、1998などを参照。

⁹ 「TVA 開発思想」は、アメリカのフランクリン・ローズヴェルト大統領が広域な地域開発の権限を一元化するために設立したテネシー川流域開発公社（TVA）による河川などの天然資源の一元管理や、タウンミーティングなどによる草の根民主主義による地域開発思想である。D.E.リリエンソール、和田小六訳、1949、宮本憲一、1973などを参照。

¹⁰ ミツカン水の文化センター、2010、p.4。

¹¹ 「命の水暴れ川を制圧せよ〜日本最大愛知用水・13 年のドラマ」として書籍にまとめられている。NHK プロジェクト X 制作班編、2002、pp.65-116。

¹² 愛知用水土地改良区の 50 周年史として愛知用水土地改良区編、2002 がまとめられた。また、久野庄太郎が設立した献体団体の不老会の 40 周年誌として浜島辰雄編著、2005 が編まれた。

浜島は『プロジェクト X』の制作協力をきっかけに、久野の失脚後の活動について積極的に語るようになった。特に、2005年に不老会の40周年誌としてまとめられた『愛知用水と不老会』¹³では、それまで語られてこなかった久野の失脚以後について詳しい記述をおこなった¹⁴。一方、久野は、破産免責の翌年の1962年から1971年にかけて『躬行者』という月刊の個人雑誌にみずからの経験を記していたが、それは研究されてこなかった。浜島は、久野の『躬行者』を直接、間接に引用しつつ、『愛知用水と不老会』の中で、久野の失脚、悟り、再起などを明らかにした。また当事者として直接立ち会った事件については、浜島本人が見聞きしたことや考えたこと、感想などを記述している。しかし、久野が失脚期間中に執筆した『光水（旅行）漫録』¹⁵という小冊子は、浜島も存在について言及しつつも、5.1で後述するように、詳細を記述することはなかった。

久野の個人雑誌『躬行者』に書かれた久野の活動やその方向性については、『人間文化研究』第37号の拙稿で明らかにしたところである¹⁶。久野は、愛知臨海工業地帯の誘致や愛知海道（第二東海道）という地域開発事業の推進などに従事していた。

本稿は、久野が破産を経験して、愛知用水の建設推進運動から手を引くよう言われた後、何があって、何を考えていたのかを考察する。特に、破産前後に駆け込んだ西田天香（1872-1968）が主宰する一燈園での久野の悟り、すなわち「大乘愛知用水観」に着目し、その後に執筆を開始した『光水（旅行）漫録』に書かれた内容に着目する。

2では、失脚するまでの「愛知用水の久野庄太郎」を検証する。3では、久野の破産と失脚について、久野の経済状況と愛知用水関連機関との関係性を明らかにする。4では、一燈園への隠栖と悟りについてのべる。5では、現存する『光水（旅行）漫録』の概要とテーマを検討する。6では、『光水（旅行）漫録』の成立とその役割について分析し、個人雑誌『躬行者』との違いを考察する。7では全体の結論をのべる。

2. 失脚するまでの「愛知用水の久野庄太郎」

2.1 愛知用水の発起人としての久野庄太郎

本章は、久野庄太郎がこれまでどのようにとらえられてきたのかを概観する。まず本節は、愛知用水に久野がどのように関わったかを確認する。

¹³ 浜島辰雄編著、2005。この編著は不老会の記念誌で非売品である。浜島は、久野の功績を公にしたいという気持ちが強かったが、非売品のため、この本の影響力は限定的であったと考えられる。

¹⁴ 浜島辰雄が編著を公表する際に久野庄太郎の孫にあたる久野格彦氏との間でやり取りがあった。その内容と今日における久野格彦氏のスタンスについては、3.1を参照のこと。

¹⁵ 『光水（旅行）漫録』とは久野が著した小冊子で、メインタイトルが『光水旅行漫録』と『光水漫録』の二つのグループにわかれる。そのため小冊子の全体を言い表す場合は『光水（旅行）漫録』と記述することとする。詳細は、5.2で説明する。

¹⁶ 柴田英知、2022。

愛知用水の建設促進は、中央と地方の政官学民あわせ多くの人びとがかかわった¹⁷。中央では政治家として、吉田茂首相（1878-1967、任期：1946-1947、1948-1954）や国会議員たち、また、農政界の大物官僚であり政治家の石黒忠篤（1884-1960）¹⁸や、中央の官僚組織である農林省（現農林水産省）、建設省や運輸省（現国土交通省）、厚生省（現厚生労働省）、経済安定本部（のちの経済審議庁、経済企画庁、現内閣府）、愛知用水公団（現独立行政法人水資源機構）などの担当者があげられる。さらには、戦後初の大規模な地域開発事業ということで、大学など研究者も関心をもって調査した¹⁹。

また地方では、久野の師匠であり農民教育家や農本主義者として知られる山崎延吉（1873-1954）を筆頭に、公人側から、愛知県知事の桑原幹根（1895-1991、任期：1951-1975）や半田市長の森信蔵（1884-1971、任期：1946-1955）をはじめ、愛知県、岐阜県、長野県、三重県の関連する市町村など地方自治体の首長や議員、担当部署の職員が、民間側から、知多農民同志会や愛知用水建設期成同盟会、愛知用水土地改良区、各地の農業協同組合、青年団、婦人会、小学校など多くの有名無名の組織や個人が関わった。

中でも、久野について多くの先行研究がある²⁰。久野が愛知用水発起人であり、後述のように複数の関連団体で中心的な役割を担ったためである。久野庄太郎は、1900年11月15日に愛知県知多市に自小作農の久野彦松の五人兄弟（姉1人、弟3人）の長男として生まれ、1997年4月8日に96歳で亡くなった。久野は、第二次世界大戦以前より県下の篤農家一家として知られていた。例えば、1935年に父の彦松と共に愛知農業功労者として、1936年に久野単身で有栖川宮農業功労賞²¹を受賞した。1945年10月には愛知県からの推薦で、県を行幸した昭和天皇に御前講義をした。

久野は47歳の時、1948年5月5日に山崎延吉が開催した「つつじの会」という篤農家²²の集まりで、木曽川からの農業用水路（のちの愛知用水）の建設推進の決意を語った²³。久野は、その日

¹⁷ 著名人だけでなく在野の個人にまで目くばりした資料が、愛知用水土地改良区編である。「第1章 愛知用水運動の軌跡」では、中央および地方で大きく貢献のあった人物を、第4節「愛知用水運動の支援者たち」としてまとめている。この中には、堀田稲荷神社、熱田神宮などの農民の打合せに会場を提供した施設などもとりあげられている。いかに多くの人や団体が運動を支えたのかが記述から伺える。同編、2002、pp. 62-69。

¹⁸ 愛知用水土地改良区編で石黒は、「愛知用水を支えた二人の指南役」の一番目にとりあげられている。二番目が山崎延吉である。同編、2002、pp. 63-64。

¹⁹ ユネスコ国内委員会による調査など。酒井正三郎編、1967。

²⁰ 主な史資料として、ミツカン水の文化センター、2010、pp. 4-9。高崎哲郎、2010、筒井栄太郎編著、1969、杉浦民平編、1970、福島達夫、1992、浜島辰雄編著、2005、「愛知用水を作った男達」展実行委員会、2008、不老会、1997などがあげられる。この節の記述は、上記を参考にした。他に、久野庄太郎を哲学者として分析した久田健吉、2020もある。

²¹ 宮家の一つである「有栖川宮」による表彰であった。「愛知用水を作った男達」展実行委員会には、「昭和11（1936）年 優秀農家として有栖川宮農業功労章を受ける。高松宮殿下が久野家農場をご視察になる。これがご縁となり、昭和25（1950）年の愛知用水ご視察につながった」とある。「愛知用水を作った男達」展実行委員会、2008、p. 4。有栖川宮と高松宮は、有栖川宮家を高松宮が継承した関係にある。

²² 「山崎延吉は毎年研農倶楽部の同志を呼び、自宅で『つつじを見る会』を催し」たと愛知用水土地改良区編にある。同編、2002、p. 12。ちなみに、研農倶楽部とは、山崎延吉が組織した愛知県下の篤農家のあつまりで、浜島辰雄編著に、1977年12月3日現在の名簿がある。浜島辰雄編著、2005、pp. 144-145。

²³ 久野庄太郎、1966a、p. 3、筒井栄太郎編著、1969、pp. 42-43、浜島辰雄編著、2005、pp. 45-46、高崎哲郎、2010、pp. 29-31。

を境に自家の農業経営を妻と母に任せて、国や地方政治家への陳情活動と、農民を主な対象とする地元住民への啓蒙運動を、同志と共に繰り広げた。久野は、これ以降、5月5日を「つつじの日」として毎年この頃になると用水建設への決意をあらたにしていた²⁴。

久野が、愛知用水に関する全ての建設促進運動団体の世話役をしていたことは注目に値する²⁵。地元の知多郡農民からなる「知多農民同志会」(1946年5月発足)、知多半島の一市25町村からなる「愛知用水開発期成会」(1948年10月1日発足)、愛知県内の関連自治体からなる「愛知用水開発期成同盟会」(1949年9月15日発足、1952年12月より「愛知用水期成同盟会」に改称)などである²⁶。また久野は、愛知用水が国営事業として採択される前提条件となる土地改良法(1944年8月制定)にもとづく「愛知用水土地改良区」の設立準備委員会(1951年8月)の委員長をつとめ、1952年3月には愛知県に設立申請をおこなった。しかし、1952年10月の愛知用水土地改良区の認可時には、元農林省の役人であった伊藤佐(1903-1966)²⁷に理事長の座を譲り、理事のひとりとして愛知用水土地改良区に関わった。

2.2 愛知用水史から消えた久野庄太郎

久野庄太郎は、愛知用水の建設推進運動を進めた最中の1954年7月に、みずからが経営する愛知農林物産株式会社という農業資材と農産物をあつかう会社が倒産し、長男の彦一ともども破産する。1955年2月10日には愛知用水期成同盟会の幹部から「今後は愛知用水から手を引くように」²⁸と宣告された。

久野は当時、愛知用水期成同盟会とは別に、愛知用水土地改良区の中でふたつの役職についていた。ひとつは総代で、1952年6月5日から亡くなる前年の1996年10月18日までつとめた²⁹。もうひとつは総代から互選で選ばれる理事で、1952年5月12日の愛知用水土地改良区の発足から任期満了の1954年4月6日まで一期2年をつとめた³⁰。久野の破産時点では、理事ではなく総代のみとなっており役職的にも目立たなくなっていた。このように久野は、1955年以降は愛知用水史の表舞台から去ったかのようにとらえられてきた。2002年以前の愛知用水史では、久野の破産な

²⁴ 後年の『躬行者』からも読み取ることができる。久野庄太郎、1966a、p. 3、および久野庄太郎、1970、p. 3。

²⁵ 団体名と日時については、ミツカン水の文化センターの年表を参考にした。ミツカン水の文化センター編、2010、pp. 6-7。

²⁶ これらの組織の詳細とその変遷については、愛知用水土地改良区編が詳しい。同編、2002、pp. 3-61。

²⁷ 伊藤佐は、愛知用水の受益地となった愛知県の豊明市の生まれで、農林省勤務時代より積極的に事業の推進に活躍した。元中央官庁勤めの彼が愛知用水土地改良区の理事長を務めたのは、これまでのいきさつを熟知していることと、農林省や愛知用水公団をはじめ、他の中央官庁にコネクションを持っており政治的にも適切な役どころであったろう。

²⁸ ミツカン水の文化センター、2010、p. 7。

²⁹ この当時は、44の区に対して205名の総代を、5つの選挙区から15名の理事と6名の幹事を選んでいる。愛知用水土地改良区編、2002、pp. 100-108を参照。理事の期間については、同書、p. 336を、総代の期間については、同書、p. 360を参照。

³⁰ 久野は破産の少し前の1954年4月6日に任期切れで理事を降した。なぜ第二期理事に立候補しなかったのかは不明である。

どの記述はない³¹。

ところが、2002 年 5 月に愛知用水事業をテレビのドキュメンタリー番組『プロジェクト X』が取り上げた際、久野の愛知用水事業の発願と住民啓蒙活動の様子だけではなく、久野の破産と不老会という事業にも言及した。久野は破産の後、不老会の他に、愛知臨海工業地帯の誘致や愛知海道（第二東海道）という地域開発事業の推進などで活躍した。これが『躬行者』という久野の個人雑誌に書き記されていたことは、『人間文化研究』第 37 号拙稿で取り上げた³²。しかし、久野が 1954 年 7 月の破産により 1955 年 2 月に愛知用水事業から手を引くように同志から言われてから、1961 年 3 月に破産が免責になるまでの期間については空白とされてきた。この間の久野の活動が明らかになったのは、次節にのべる浜島辰雄の活動が契機となった。

2.3 浜島辰雄による久野庄太郎の顕彰

本節は、久野庄太郎の失脚期間について告白した浜島辰雄の思いについてふれる。久野が破産して愛知用水の建設推進運動から追放された時期の動向が表に出るようになったのは、浜島が、積極的に告白するようになった 2002 年以降である³³。浜島は、その心境を、不老会 40 周年記念誌として 2005 年にまとめられた『愛知用水と不老会』の「まえがき」で以下のように言っている。

（前略）特に平成 14 年〔2002 年〕5 月には NHK の『プロジェクト X』で全国に報道され、私はそのつど、編纂に参画したり、資料について協力してきましたが、編纂の主旨、紙数の関係で、私達が当初にいただいていた意図や理想を十分表現できなかった憾がありました。とくに久野庄太郎さんを中心とした地域の同志の人達の協力、久野さん自身の辛酸の機微に類する部分については、充分表現することができなかったと思っています³⁴。

今、新世紀を迎え、多くの当時の同志は黄泉の客となり、残された一人として、当時の真実の姿の一端でも残しておきたいと秃筆を顧みず筆を取った次第であります³⁵。

浜島の「久野庄太郎さんを中心とした地域の同志の人達の協力、久野さん自身の辛酸の機微に関する部分」については、浜島がかかわった 2002 年の『愛知用水土地改良区五十年の歩み』や 2005

³¹ 『愛知用水史本編』は「第 3 章 用水の胎動」で、久野庄太郎と地域農民らの期成運動について詳しくふれているが、久野の破産の記述はない。それ以降の章では久野についての記述はない。愛知用水公団、愛知県編、1969a、pp.123-180。

³² 柴田英知、2022。

³³ 日本の植民地史の研究者であるやまだあつしの直話によれば、浜島は、この 2002 年の NHK のテレビ・ドキュメンタリー以降、久野についてのみならず、自分自身の南満州鉄道での勤務経験など、それまで語ってこなかった戦前や戦中の経歴や経験について、積極的に公表するようになったという。管見では、浜島が新たに告白した内容は、愛知用水土地改良区編（2002）および浜島辰雄編著（2005）に反映されている。

³⁴ 浜島辰雄編著、2005、p.22。角カッコ内は筆者による。

³⁵ 同上書、p.23。

年の『愛知用水と不老会』の中でいくらかは明らかにされたが、特に「久野さん自身の辛酸の機微」について、引き続き次章で検討する。

3. 久野庄太郎の破産と失脚

3.1 久野庄太郎の個人雑誌『躬行者』における告白

久野庄太郎の破産や失脚は、遺族や関係者の感情に鑑みるに、本来、大きく取り上げられるべきことではない。ところが『プロジェクト X』は、久野の破産を大きな出来事として取り上げた³⁶。その後、浜島辰雄は2005年の『愛知用水と不老会』の中で、深くその内容に言及した³⁷。久野の「辛酸の機微に類する部分」であり、久野の大きな転機となる重要事件という浜島の認識があったと思われる。また、後述のように久野本人が破産の経緯や再起について個人雑誌『躬行者』で書き残していたことも、執筆する浜島の背中を押したと思われる。

本稿においても久野の破産、失脚と再起は、久野の空白期間を明らかにし、その後の活動を考察するために必要不可欠な時期であると考え、直接、遺族に照会したところ、すでに公知の歴史的事実であり、学術研究として必要なことであればということで、取り扱うことのできた³⁸。

久野が、個人雑誌『躬行者』の「終生忘難」というコラムの中でみずからの破産、失脚、悟りや再起などにふれた記事は表1のとおりである³⁹。表中にある「一灯園」とは西田天香が主宰する修養団体で、正式には「一燈園」と記述する。本稿では久野が「一灯園」と書いたときのみ、そのように表記する。

表1 久野庄太郎による破産と一燈園についての『躬行者』の記事

タイトル	『躬行者』「終生忘難」		二次資料への引用
	号	発行日	
はさん	第8号	1963年5月5日	筒井編著 pp.76-79. (全文を引用)。高崎言及
天香さん	第66号	1968年4月5日	「終生忘難」、『光』569号 ⁴⁰ 、1968年6月、 浜島編著 pp.254-259 および pp.264-265 (部分引用)、 高崎言及
一灯園	第67号	1968年5月5日	浜島編著 pp.260-263. (部分引用)
一灯園	第68号	1968年6月5日	浜島編著 p.265. (部分引用)
更生	第69号	1968年7月5日	浜島編著 pp.265-267. (部分引用)
浜島辰雄さん	第70号	1968年8月5日	なし。

³⁶ 「しかし、このとき久野はすべてを失ってしまっていたのである。(中略)そして、とどのつまり窮した。(中略)一時は、自宅も借金のカタに手放したこともあった」と書籍では書かれているが、テレビは久野の「破産」を明言している。NHKプロジェクトX制作班編、2002、pp.96-97。

³⁷ 久野庄太郎の孫にあたる久野格彦氏(株式会社三祐コンサルティング社長)によると、浜島辰雄の原稿に対して、関係者に迷惑のかからないように記載内容やプライバシーについて配慮するよう申し入れたそうである。しかし、浜島から「ある程度、具体的に書き記さないと意味がない」と言われて公開を押し切られた部分もあったとのことである。

³⁸ 久野格彦氏と2022年5月16日に面談し、情報交換と研究に対する見解を伺った。特に、ここに記して謝意を表明したい。

³⁹ 個人雑誌『躬行者』の成り立ちや内容について拙稿で概略を取りまとめた。柴田英知、2022、pp.52-57。

⁴⁰ 『躬行者』第66号は西田天香の死をきっかけにかかれたものである。その内容から一燈園の機関誌においても丸ごと転載されて紹介されたものと考えられる。

出典：筆者作成。凡例：筒井編著＝筒井栄太郎編著（1969）、浜島編著＝浜島辰雄編著（2005）、高崎＝高崎哲郎（2010）。なお『光』とは一燈園の機関誌である。

『躬行者』第 66 号の記事が書かれたきっかけは、西田天香が 1968 年 2 月 29 日に亡くなったことであった。久野は、この号の「終生難忘」というコラムで西田を追悼した。その中で、西田との初対面のこと、そして再会すなわち一燈園への隠栖のきっかけとなった愛知用水の建設推進運動から追放されたことについて自らの心境を告白した。引き続き『躬行者』の第 67 号から第 68 号にかけて一燈園での生活と悟りおよび再起を書き綴った。第 69 号には、一燈園から下山した久野が、どのような活動をしたのかが書かれている。そして、第 70 号には、浜島が愛知臨海工業地帯の誘致に果たした役割などについてふれている。

久野の個人雑誌『躬行者』は、ほとんど知られていなかったが、その記事を参照した浜島辰雄編著（2005）が自身の経験も踏まえて二次資料として外部に公刊した。ここで留意すべき点は、久野は、『躬行者』に「今までやってきたこと、今やっていること、これから取り組んでいくこと」⁴¹について、みずからの内省や事実を記述しているのであるが、同志であり当事者でもあった浜島も、久野との体験のみずからの言葉で書き記したことである。浜島の記述には、『躬行者』をふまえた上で、彼自身の経験を書き加えているところが見受けられる。本稿では、久野の記述を中心にしながらも、正確をきすために重要だと思われる浜島の記述も必要に応じて併記する。

愛知用水 50 周年を契機に、2010 年に高崎哲郎によって著された愛知用水史である『水の思想土の理想』では、久野の個人雑誌『躬行者』も参考しつつ、主に浜島辰雄編著（2005）の記述をもとに、この久野の苦難の時期のことを紹介している。

3.2 久野庄太郎の会社の倒産

本節は、久野庄太郎の個人雑誌『躬行者』の関連記事、浜島辰雄編著『愛知用水と不老会』（2005）および高崎哲郎『水の思想土の理想』（2010）にもとづき当時を再現する。浜島編著は「第 12 章 用水運動を支える」と「第 13 章 新しい門出」の二つの章で久野の会社設立、会社の倒産と久野の破産および一燈園への隠栖と再起を書いている⁴²。高崎は、第 9 章の「久野の会社、破産」、「運動から排除される」、「どん底（一燈園での懺悔の生活）」の 3 つの節で、この経緯にふれている⁴³。

久野は、愛知用水の建設推進運動を始めた時から、自分自身が破産する可能性を意識しており、覚悟もしていた。複数の識者からその覚悟を問われていたからである。例えば、1948 年 5 月 5 日の「つつじの日」、山崎延吉らとの花見の席で愛知用水の建設のことを初めて話題に出したときに、山崎から「古来、用水事業を企てたものは、例外なしに、破産、憤死、受刑など、悲しい最期を見

⁴¹ 柴田英知、2022、p.83。

⁴² 浜島辰雄編著、2005、pp. 247-279。

⁴³ 高崎哲郎、2010、pp. 157-162。

ている。明治用水などもそのよい例だ。しかし、男子がそれほどまでに思い込んだことなら、迷わず断行せよ。(後略)」⁴⁴という言葉をかけられている。久野は「ここではじめて、『やる』と決心した(下線部は傍点を示す)」⁴⁵とのべている。

また、1949年1月に久野は、当時、農林省開拓局長であった伊藤佐と面談した際に、溝口三郎編著の『雨邨水利史談』を読むように勧められた。この本は、日本各地の22の用水や新田開墾事業と三本木原開墾記を概説しているが⁴⁶、久野は、「その何れもが誠心を盡して事業を成し遂げた暁に横死、刑死、破産等むごい目に逢った事例が並べてあった(下線部はゴチック体を示す)」⁴⁷と理解した。すべての事例が悲惨な結果であったわけではないが、久野はこの本から、用水開発の苦難と段取りの仕方を学んだ。久野は、先人の苦難を学びつつも、それでもやると決意を固めた⁴⁸。

このような外部からの指摘もふまえ、久野の私設顧問であった緋田工は、北海道や九州の農作物や農業資材などを取り扱う会社の設立を久野に提案する。それを受け1949年4月に久野が社長、長男の彦一が専務取締役、緋田が常務取締役という体制で、従業員も雇用して「愛知農林物産株式会社」という事業を始めた⁴⁹。緋田は、この会社を作ることが愛知用水の建設推進運動の金銭的な助けになると考えていた。それまで久野は、父親の彦松と兄弟総出で手に入れた5町歩の田畑を一枚一枚売って、愛知用水の活動資金に充てていたのである。

愛知農林物産株式会社が愛知用水の建設推進運動に果たした役割については、浜島辰雄編著(2005)が詳しい。浜島は、「当初、愛知用水運動の資金は運動員各人の拠出であり、昭和23年[1948年]10月1日、愛知用水期成会ができたものの、会費の拠出は思うにまかせず、運動費の建て替えは二、三の協力的な農業協同組合などに頼ったが、それも限界があり、久野さんの個人的な資金提供が大きかった(角カッコ内は筆者による)」⁵⁰とのべている。

久野は名ばかりの社長で、愛知用水の期成活動のたびに会社からお金を持ち出していた。浜島によると、手形不渡りを察知したある債務者の取立人が、1954年7月16日の夜、社員をだまして倉庫の中の商品(小豆、澱粉、畳表など)をトラックごと持ち出し、その翌日に手形が不渡りとなり、会社は黒字のまま倒産したという⁵¹。社長の久野庄太郎と専務の彦一は、破産者となり家財全部が差し押さえとなるが、久野の弟らにより家屋敷だけは買い戻された。

久野は、破産しながらも愛知用水の建設推進運動をやめなかった。久野本人の言及については3.3でふれるが、浜島も編著の中で語っている⁵²。

⁴⁴ 久野庄太郎、1966a、pp.3-4、筒井栄太郎編著、1969、p.42。

⁴⁵ 久野同上書、p.4、筒井同上。

⁴⁶ 溝口三郎編、1948。

⁴⁷ 久野庄太郎、1963b、p.4。

⁴⁸ 浜島辰雄も、久野は「本屋にあるだけ、五十冊を買い、『これを同志に配って読んでもらい、これでもやると決意を固めて用水建設運動を続ける』とお礼を言って帰った」と記している。浜島辰雄編著、2005、p.165。

⁴⁹ 高崎哲郎、2010、pp.157-158。

⁵⁰ 浜島辰雄編著、2005、p.249。

⁵¹ 浜島同上書、pp.250-251、高崎哲郎、2010、pp.157-158。

⁵² 浜島辰雄は、その編著で「そういう一家離散の中、ふつうの人なら意気消沈して参ってしまうところだが、久野庄太郎さんはますます生き軒昂。愛知用水着工のため愛知用水公団設立、外資導入前の直前の一番大切な時だから、わが家の破産、離散も覚悟の上と、関係市町村を廻り、愛知用水完成後の水利利用の計画作成の利水委員会設立を説いて歩いた」と記載している。浜島辰雄編著、2005、p.252。高崎もこの浜島の文章をほぼそのまま引用している。高崎哲郎、2010、p.158。

3.3 愛知用水期成運動からの追放

本節は、久野庄太郎が愛知用水の建設推進運動から手を引くようにいわれた事件についてのべる。当事者である久野と傍らで見守っていた浜島辰雄のそれぞれの思いにふれたい。

浜島によると、1955年2月10日に久野と浜島は連れ立って、大府、豊明の利水委員会の要望で農林省（現農林水産省）の役人の現地調査に同行していた。正午頃に常滑農協に4時頃までに立ち寄るよう連絡を受ける。久野と浜島が出向いたところ、愛知用水期成同盟会副会長の中川益平（武豊町長）、滝田次郎（県会議員、元常滑町長）、田村金平事務局長の3名が待ち構えていた⁵³。その面談の様子について、久野本人が書いた文章を『躬行者』第66号から引用する⁵⁴。

久野は、中川から「久野さん愛知用水については長くお骨折り下さったが、今日限り愛知用水から去って頂きたい」といわれた。久野は、中川の「言葉の意味がサッパリ解らず」、思わず「何のことですか」と聞き返した。中川より重ねて「あなたは立派な人だ、あなたを傷つけてはいかん。だからこの際止めて貰った方が、あなたのためだと思う」といわれる。このやりとりの間、久野は次節にのべるような内省をしていたのであるが、以下のような言説が思い当たった。

そして俺が発起して俺が中心で廻している用水から俺を追出す権利がどこにあるか。毎日無休腰弁で走っている俺を追放する理由がないと、いよいよ全身の血は逆流をはじめたが、言葉にならなかった。向う様も無言、十年の風雨が一挙に吹き返す心境。十秒、二十秒、その内にフッと気付いた。こんな大問題に対してなぜ三人しか出席せんのだ、今日来ない連中の顔を想像してハッと気がついた。まてよ、いやなことを言う役をしよわされて来たこの三人はあるいは俺の味方かもしれんぞと思った。

やれということはやすいが、止めよということはいいい憎いものだ。三人様はよくよく俺に対して親切な人だな、と気がついて遂に止める決心をした。誠に終生難忘の一分間であった⁵⁵。

この事件については浜島辰雄編著（2005）でも取り上げられている⁵⁶。おそらく浜島編著を参考にして、その後の二次資料でもこの事件のことが広く言及されるようになった⁵⁷。ところが、『躬行者』第66号には、それ以外にも次節のような久野の内省が書かれていた。

⁵³ 浜島辰雄編著、2005、p.254。浜島は、「愛知用水期成会」と書いているが、時期的に「愛知用水期成同盟会」が正しいと思われる。また、浜島は、滝田を「愛知用水期成会副会長」と書いているが、中川の間違いで、滝田は常任委員であった。田村は幹事であった。愛知用水土地改良区編、2002、p.54。

⁵⁴ 下記の段落中の引用は、久野庄太郎、1968a、pp.2-3より、筆者が時系列に並び替えて書きだした。また下線部はゴシック体を示す。

⁵⁵ 久野庄太郎、1968a、p.4。下線部はゴシック体を示す。

⁵⁶ 浜島辰雄は、久野の『躬行者』第66号の内容をふまえつつ、当事者として同席していた自分の感慨をあわせて当時の様子を書きつづけている。浜島は、中川益平の言葉として「久野さんのこのたびの破産宣告については期成同盟会森会長ともども重大な責任を感じている。お陰で愛知用水も着工の見込みが立つところまで来ました。久野さんにこれ以上の負担をかけるには申しわけない。森会長とも相談の上であるが、今日から愛知用水運動から手を引いてもらいたい」という言葉と、「さすがの久野さんも画面蒼白、一点をにらんで沈黙考。しかし、『ハイ、わかりました。いろいろお世話になりました』という言葉がでるまで五分とはかからなかった」ことを伝えている。浜島辰雄編著、2005、pp.254-255。

⁵⁷ 高崎哲郎、2010、pp.157-160、ミツカン水の文化センター、2010、p.7など。

3.4 久野庄太郎の愛知用水の理想と現実

本節は、久野庄太郎が中川益平らと対峙している渦中で考えていたことを検討する。浜島辰雄編著『愛知用水と不老会』（2005）でも一部ふれられているが、久野の『躬行者』第66号の記述を浜島が解釈して編集したと思われるところがある。そのため、久野の記述を直接引用する⁵⁸。

（前略）私は、その頃、自家は破産状態であった。（中略）しかし何がどうなってもただ一途に、用水が大切であると思って、次々と運動計画を立て、狂奔していた。

一、公団の民主化を望み、受益者と親密になって頂く運動

二、農民の自主性確保の推進運動

私の主張は「公団は我々の雇った職人である農民は公団を雇った事業主である」を信条としている。だから、心中では公団の総裁理事以下八百人の人々はもはや官人ではなく、我が愛知用水を作るために下りて来た民人である。だから意張ってはいかん。（中略）

農民は雇用主だから、といって意張る必要は毛頭ないが、職人にへいつくばる必要もない⁵⁹。

このような態度で、それぞれの事業主体に対し久野は表2のような「理想」をもって運動をしていたことを中川の話を書く最中に述懐している。この内容について浜島も言及しているが、そこには浜島の解釈も見受けられる⁶⁰。

表2 久野庄太郎の愛知用水建設運動における理想

訴えた相手	内容	久野の見立て
愛知用水土地改良区	当座の繰廻金を公団に借りるな。いま拡張する必要はない。大きな机やロッカ等買うな。など。	尚早無用の拡張をし、金に困って公団に借りようとしている。
愛知用水公団	土地改良区に金を借してくれるな。金のかかる記録映画等は…農林省に作って貰え。など。	お役所化しようとしている。
農林省 （愛知用水管理者）	公団から土地改良区へ対して金を貸さすな。	この言にはかなり抵抗があったと後日きいた。
農民	用地買収に協力せよ。土地改良の負担金を出し惜しむな。など。	用地協力を渋っている。

（出典：久野庄太郎、1968a、p3 を元に筆者作成）

久野の理想は正論ではあるが、当事者にとって耳の痛いものであったと思われる。1955年2月10日から13年2ヵ月経った1968年4月の記述であり、久野の内部で整理をして告白している

⁵⁸ 引用文の、「一」、「二」について浜島辰雄編著（2005）には記載がないが、高崎は言及している。高崎哲郎、2010、p.158。

⁵⁹ 久野庄太郎、1968a、p.3。下線部はゴシック体を示す。

⁶⁰ 浜島辰雄編著にも、久野庄太郎の『躬行者』、第66号を参考にした同様の記述がある。「そこで私は、1 土地改良区は公団ができたから高給の人を雇うな、大きな机や部屋を持つな。2 公団は土地改良区に金を貸すな。後から返さねばならぬ。3 記録映画は公団で作るな。必要ならば、愛知用水以外の人だ。政府で使ってもらえ。4 農林省の管理官は土地改良区に金を貸すな。5 農民は自分達の用水を作るのだから用地買収に文句を言うな。国のきめた価格に不等性（原文ママ）はないはず。6 公団は御役所ではないから、威張るな。と言って廻っていた」、浜島辰雄編著、2005、pp.264-265。なお、高崎哲郎（2010）に、このような言及はない。

と思われる。しかし、愛知用水公団や愛知用水土地改良区や農林省、農民などの当事者も見るとであろう『躬行者』でわざわざ言及したことには、この事実を書き残さなくてはならないという覚悟があったと思われる。また久野が自分で気がついている範囲での記述であり、これら以外にも久野本人が意識せずに同様の言動をした可能性がある。

4. 一燈園への隠栖と「大乘愛知用水観」の悟り

4.1 久野庄太郎の一燈園への隠栖

本章は、久野庄太郎が愛知用水の建設推進運動から手を引くようにいわれて駆け込んだ京都の一燈園での隠栖生活の中で、何を考え、何をおこなったのかを検討する。本節の記述は、浜島辰雄編著『愛知用水と不老会』（2005）を参考にする⁶¹。

久野は、1955年2月10日に同志から愛知用水から手を引くように勧告された翌日、浜島と共に名古屋で材木商を営む支援者の加藤周太郎（1892-1960）⁶²や金山に住む三弟（平一）、そして大阪の次弟（金之助）の家にいき、今後の身の振り方を相談する。久野は引き続き、北陸の福井県吉田郡の曹洞宗大本山の永平寺での参禅を考える。しかし、同行した浜島によると、「北陸は大雪で北陸線は不通。ましてや永平寺の山には入れない」⁶³ため、京都の山科にある旧知の西田天香が主宰する一燈園に行き先をかえた⁶⁴。久野は、1955年2月12日から3月15日まで一燈園に引きこもって精神修養をおこなう⁶⁵。一燈園に寄宿する中で、久野は自分と、そして西田と向き合い、新たな生きる目的と自分の使命に気づく。

ここで、浜島と久野の記述の違いを確認する。浜島は、先にのべたように愛知用水から手を引けといわれた場に同席した。その後、浜島は「久野さんの身が心配で、しばらく久野さんについて廻ることにした（そのことは田村、中川の二人にそっと耳うちした）」⁶⁶などとあるように、久野と同時に体験したことは、久野が個人雑誌『躬行者』に記述したことに、自分の思いやその背景などを付け加えて詳細に記述している。しかし逆に、久野が書き残していないことについても自分で補って書いてある。浜島の文章は、実際の久野の言葉なのか、浜島の言葉なのかがわかりにくい。可能

⁶¹ 久野庄太郎、1968a、p.4にも記載があるが、浜島辰雄編著、2005の方が詳しい。

⁶² 加藤周太郎は、「名古屋木材社長、愛知用水運動の推進に物心両面で支持してくれた」と、愛知用水土地改良区編の第1章第4節「愛知用水運動の支援者たちの」のうち、「1. 用水運動の後を偲ぶ一忘れえぬ人、忘れられないこと」で11名の最初に写真入りで取り上げられている。愛知用水土地改良区編、2002、p.62。

⁶³ 浜島辰雄編著、2005、p.258。

⁶⁴ 同上。久野もこのことにふれている。久野庄太郎、1968a、p.4。

⁶⁵ 久野庄太郎本人による一燈園に関する記述は、久野庄太郎、1968a、p.3、久野庄太郎、1968b、p.3、久野庄太郎、1968c、p.3を参照。これらの『躬行者』記事も参考にしながら、浜島辰雄も、彼の視点から経緯を書いている。浜島辰雄編著、2005、pp.254-267。

⁶⁶ 浜島辰雄編著、2005、p.256。

な限り久野の記述と浜島の記述を相互に確認する必要がある。

4.2 西田天香と一燈園

本節は、西田天香⁶⁷と一燈園についてのべる。同園のパンフレット⁶⁸によれば、西田天香は1872年に滋賀県長浜の商家に生まれ、20歳の時、小作百姓100家族を率いて北海道にわたり、500ヘクタールの開拓に従事した。しかし、資本家（出資者）と現地耕作者との間に生じた利害対立に直面して苦悩し、開拓事業そのものを他に委ね、人間として争いのない生き方を求めて求道の日々を重ねた。三日三晩の断食籠坐の果で、母の乳を求める赤ん坊の泣き声を耳にして、そこに争わずとも恵まれた食のあることと生命の原点を見出し、京都で1914年にいわゆる「一燈園生活」を創めた。それは、無一物・路頭を原点としての懺悔・下座の奉仕、許されて生きる「托鉢」の生活であったという。つまり一燈園は、「自然に適うた生活をすれば、人は何物をも所有しないでも、また働きを金に換えなくても、許されて生きる、という信条のもとに、常に懺悔の心をもって無所有奉仕の托鉢生活を行っているところ」⁶⁹である。

西田の主な著作は、大正年間に大ベストセラーになった『懺悔の生活』（1921）である。また大正の終わりから昭和にかけて、日本各地のみならず、当時の朝鮮半島から満州（中国東北地区）、更には中国本土、そしてアメリカ各地や、ジャワ島にも請われて同行者と共に渡り、徹底した下座の路頭托鉢をしている⁷⁰。第二次世界大戦後には推されて参議院議員（任期：1947-1953）になった。

久野庄太郎が西田を知ったのは『懺悔の生活』を読んだからであったが、実際に会ったのは、「昭和16年〔1941年〕本県〔愛知県〕経済部長安積得也先生の御紹介に依って、県下農村同志30名が揃って一燈園で二泊三日の知徳研修会に参加した時であった」⁷¹という。

久野は、『躬行者』第67号の中で、一燈園での生活を書いている。2月12日に一燈園に逃げ込んで数日間は洋服を着て、いわば客人の立場であったが、朝のお勤めなど一燈園の行事に参加していた。3日目からは、同人という一燈園での共同生活者と同じように、「黒い半てんとモンペ」の黒装束を着、市内の一般家庭へ、便所の掃除にいく六万行願という修行に参加した⁷²。4.3で後述する「大乘愛知用水観」の悟りを得た久野は、一燈園内に建設されることになった維摩堂の土木工

⁶⁷ 西田天香の生涯については、宮田昌明、2008や西田天香、1995、一燈園、出版年不明 a,b を参考にした。

⁶⁸ 一燈園、出版日不明 a、表面。

⁶⁹ 一燈園、出版年不明 b、表面。

⁷⁰ 一燈園、出版年不明 a、表面。

⁷¹ 久野庄太郎、1968a、p.3より。角カッコ内は筆者による。なお、『躬行者』第66号の「終生難忘」を丸ごと転載した『光』によると「第1回知徳研修会」であったことを「編者附記」に書いている。一燈園、1968、p.35。

⁷² この段落の引用はすべて、久野庄太郎、1968b、p.3より。

事などにも参加した。久野は、「短時日（原文ママ）であったが、天香さんの懐中話を聞く程の懇意」になり、「指導者の自律と指導の苦心」などを知った。その他、西田とのやり取りや一燈園のあり方などについても伝えている⁷³。

久野は、後述する小冊子『光水（旅行）漫録』でも一燈園について説明している。1956年発行の『光水旅行漫録』の4冊⁷⁴の「後記」で、ほぼ同じ文章である。例えば久野は、「一燈園とはどんなところか」を下記のように説明する。

「一燈園」とは今から五十六年前に西田天香さんが始められた珍しい生活で、その内容を簡単に要約すれば、“人は自然にかなうた生活をすれば、無一物からでも豊かに生きられる”ことを実証されたもので、云いかえれば、“お互い人間は金儲けのためのみに仕かない（原文ママ）でも、他のために捧げて奉仕してゆけば、求めないでも必要なものは興えられ、そこから世の中のあらゆる問題が解消し争いのない平和な生活が出来る”ということ、身を以て教えられつゝあるのであります⁷⁵。

引き続き「これを一つの宗教としないで『生活』と云い、又『生き方の新しい試み』とよんで」おり、西田を中心に500人の仲間ができ京都の山科で「300人余りの人達が完全な共同生活を営み、これを『財団法人光泉林』とよんで」いることを伝えている。そしてこの団体を中心に日本全国や海外にまでたくさんの共鳴者がおり「光友会」を組織して世界平和のために活動しているという⁷⁶。

一燈園には、園内で共同生活をおこなう「同人」と、広い意味では一般の理解者、賛同者、狭い意味では「光友会」の参加者である「光友」の立場があった。久野は、光友であったが、1955年3月に「一燈園内の無怨堂に於て、天香老師の授戒を受け、色々のお誓い」をし、また「光水」という号（一燈園では光名という）を授かったことを『光水旅行漫録 工業用水編・酉の新年』の中のべている⁷⁷。一燈園同人が、光名を名乗ることはよくあるそうであるが、久野が光名を得たことは、久野と西田の関係の深さをあらわしているといえる⁷⁸。

また久野は、「後記」の末尾に西田天香の名言名句を紹介しているが、これらも久野の当時の心境をあらわしていると思われる。

求める心は淋しい。捧げる心は豊かである。（天香）

車がうまく動く時、それに最も必要であつた油はどこかになくなってしまふ。人も世の中で、

⁷³ この段落の引用はすべて、久野庄太郎、1968c、p.3より。

⁷⁴ 久野庄太郎、1956a、1956b、1956c、1956e。

⁷⁵ 久野庄太郎、1956a、p.46。

⁷⁶ 同上。

⁷⁷ 久野庄太郎、1956e、p.5。

⁷⁸ 久野庄太郎の光友としての立場と光名の授戒についての考え方について、一燈園の香倉院の宮田昌明氏にご教示いただいた。

その油になることが出来るならば大事業である。(天香)⁷⁹

下山後も久野と一燈園とのかかわりは継続しており、『光水旅行漫録 天香さん御案内の弁』の「後記」で、「今日まで気付かなかった自らの修養をこれからここでさせて頂こうと思っております」⁸⁰とのべている。

4.3 「大乘愛知用水観」の悟りと再起

本節は、久野庄太郎の一燈園での悟りと再起について、久野の個人雑誌『躬行者』と浜島辰雄編著の『愛知用水と不老会』を参考に記述する⁸¹。

久野は、『躬行者』第67号で一燈園での生活にふれた後、「懺悔」という見出しで自身の悟りを説明している。久野は、「どんなおつとめをしても、亦便所掃除をしても」頭のもやもやは去らず、「用水の知人は皆裏切られたうらみの対象で」、「この一週間が、一年位に思われた」中で西田天香の道歌にふと注意が向いたという個所を引用する⁸²。

一燈園では毎朝のお勤めの中に天香さん作の道歌を朗誦されます。その中の一首に、

「なべて世のさわりの根をばたづねゆけば

おのが罪とぞかえりきし業」⁸³

というのがあります。毎朝その歌を詠っていたのですが、今まで気がつかなかった。その朝はじめてその歌が気にかかった⁸⁴。

久野は、「何回も繰返して暗唱していると」自分のことのように思われ、室に戻って一時座ってまた考えた結果、「(前略)次第に『俺が悪かったかしら』と思うよりほかに思い様がないことになった。俺の用水と思って、思ったことを云った。俺は組織の中には生きられない人間だった様だ。皆様に済まん事をしたかなと、思ったら俄かにふるい気が来た」という⁸⁵。この天香の歌は、「生活のすべてにおいて他を責めたり非難するのではなく、互いにまず自分のいたらなさをかえりみる。そ

⁷⁹ 久野庄太郎、1956a、p.47。

⁸⁰ 久野庄太郎、1956b、pp.45-46。

⁸¹ 久野庄太郎、1968b、pp.3-4 および久野庄太郎、1968c、pp.3-4 に書かれたことを中心に論じる。浜島辰雄は、これらの記事を参考に自らの視点から書き直している。浜島辰雄編著、2005、pp.261-263。

⁸² 引用は全て、久野庄太郎、1968b、p.3 より。

⁸³ この歌について、一燈園では、「なべて世の障りの根をばたづねゆきておのが罪とぞかえりきし行願(わざ)」と記述している。一燈園、出版日不明 a、表面。

⁸⁴ 久野庄太郎、1968b、p.3。

⁸⁵ 同上。

してつねに他より下に自らを置き、悩める人、弱い人の立場で生活すること」⁸⁶、つまり懺悔と下座の生活を説く重要なものであった。

ちょうどその時、西田から電話で招きがあった。久野は、下記のように振り返っている。

私は瞬間電気に触れたように、「あれっ」と思った。曾ってない恐怖を感じてお伺いした。いつお逢いしてもいい笑顔の天香さんです。「どうですか」とやさしくいわれたので、天香さんは私の心中を御存じだ天香さんは生きた仏様だと思った。私は心中を見抜かれたと恥入って頭を下げて「解りました」といった。誠に終生難忘の一瞬であった⁸⁷。

一燈園の農業主任の横沢松次郎が、久野が百姓であることを聞いて、毎夜、農談にきていた。その中でたまたま便所が詰まった話がでたという。引き続き、久野の言葉を引用する。

その解決を私がお引受けしたので、それを天香さんに話されたい。私が解ったといったのは、便所が一杯であることが解ったのだと解されたいので、私は入園以来初めて声をあげて心から笑った。天香さんは汚い作業を私が快く引受けてくれたと思って共に笑われた。私は心中 霧散、霧消⁸⁸。

久野は、「もう座禅する必要はない。只懺悔あるのみだ。懺悔の前に不浄も清浄もない。坐禅（原文ママ）より小浄片付けの方が得策である」⁸⁹と便所掃除にいそしむのである。久野は懺悔の後に、先にのべた中川益平や滝田次郎、田村金平の他にも、県会議員の日高啓夫、浜島等が次々と慰問にきてくれたことと、彼らを西田天香に紹介したことにふれている⁹⁰。

その後の「再起」について、久野自身の言葉を引用する。なお、浜島編著（2005）でも、この部分にふれている⁹¹。

晩雪も消えて東山に鶯のなく三月もくれ、小乗愛知用水観を解脱し得た途端に、大乘愛知用水観に目がさめた。即ち農民の負担の軽減と用水の多目的利用計画については、俺がやらねばならぬという責任と俺ならばやれるという自信を感じた。

⁸⁶ 一燈園ホームページの「懺悔・下座の生活—わびあい・拝みあい」より引用。2022年5月26日閲覧。

https://www.ittoen.or.jp/about/ittoen_seikatsu/zange_geza/

⁸⁷ 久野庄太郎、1968b、p.3。

⁸⁸ 久野庄太郎、1968b、p.4。

⁸⁹ 同上。

⁹⁰ 引き続き、久野は、来訪者に西田を紹介したところ、「人々が一燈園に感心された」ことや、「将来我が郷土に天香さんをお迎えすることを約して貰った（下線部はゴシック体を表す）」ことを記述している。久野庄太郎、1968c、p.3。

⁹¹ ほぼ同じ文章を引用しているが、浜島は、「イ 愛知用水の農民負担金の軽減、ロ 用水の多目的利用計画」とわけて記述している。浜島辰雄編著、2005、p.265。

この対策はかねてからの立案である、臨海工業地帯造成計画であった。かくして再び仕事を思い、俄かに霊の躍動を感じた⁹²。

久野は一か月余りの滞在後、1955年3月15日に「約束どおり妻が迎えにきた」⁹³と記しているが、浜島編著には、久野を迎えにいった農村同志会の仲間たちと一燈園の西田および同人の総勢43名の集合写真が掲載されている⁹⁴。この個所においても、久野の記述だけではなく、他の当事者である浜島の記載をあわせて検討する必要があることを示している。

4.4 一燈園から下山後の久野庄太郎の活動

本節は、一燈園から下山後の久野庄太郎の活動について概略をのべる。浜島辰雄は『愛知用水と不老会』（2005）の中で、その後の久野の活動にふれている。浜島が2005年時点で振り返って書いたもので、その当時に渦中の久野がどのようなことを考え、何に重きをおいて活動していたのかを示すものではない。

浜島は、久野が一燈園を下山したのち、臨海工業地帯の可能性について旧知の専門家の意見を聞くために上京するなどの活動を再開したこと⁹⁵や、久野の息子の彦一を中心に1955年4月5日に株式会社三祐商店（のちの三祐株式会社）を設立して、黒部ダムの特設トンネル工事のボーリング工事の下請けをしたことなどをのべている⁹⁶。また、浜島は久野と一緒に、1955年8月に吉田茂前総理にお礼と報告をするため箱根の別荘に参上したことを『躬行者』第48号から引用している⁹⁷。

その後、久野が働きかけて実現した1955年9月24日の「愛知臨海工業期成会の結成」、1957年頃の「佐布里池の構想」などをへて、1960年2月に、臨海工業地帯が知多西岸に設置されることになった経緯を浜島はのべ⁹⁸、久野が1961年3月4日に名古屋地方裁判所民事二部より破産が免責になったことも伝えている⁹⁹。その後、三祐株式会社の順調な発展もあって、「海外開発を行う会社の設立の運びとなり、1962年2月10日に、株式会社三祐コンサルタンツ・インターナショナルを設立し、久野庄太郎社長、久野彦一専務ということになった」¹⁰⁰ことをのべている。

ここで確認すべきは、以下の事実である。久野は1954年7月の破産から1961年3月の免責に

⁹² 久野庄太郎、1968c、p.4。

⁹³ 同上書、p.3。

⁹⁴ 浜島辰雄編著、2005、p.264。

⁹⁵ 浜島辰雄は、この部分を久野の記述を参考に書いている。久野庄太郎、1968d、p.3。

⁹⁶ 浜島辰雄編著、2005、pp.268-270。

⁹⁷ 同上書、pp.276-279。久野庄太郎、1966b、pp.3-4。

⁹⁸ 浜島同上書、pp.282-296。

⁹⁹ 同上書、p.307。

¹⁰⁰ 同上書、p.308。角カッコ内は筆者による。浜島は、「世界銀行のプロジェクトの進め方を見ると、技術者の集団がそれぞれ得意の分野の計画を樹立するコンサルタンツ会社が重要な役目を果たし、計画を進めていく状態を見て、日本でもこういう専門の企業体が成立できるのではないかと考えた」としている。同、p.307。この会社は、戦後の日本の建設コンサルタント会社あるいは開発コンサルタント会社のはしりの一つとなる。

いたるまで、親族や同志の助けもあって、多くの制約はあったものの、上述のような活動を続けていた。1961年9月の愛知用水完成時には、すでに破産が免責されていた。翌1962年2月には、国内だけではなく海外の地域開発をおこなう建設コンサルタント会社の社長になっていた。

これらは、浜島が2005年の『愛知用水と不老会』で明らかにするまで、愛知用水史において表だって論じられることはなかった。久野の失脚後を明らかにした浜島の功績は大きい。しかし、一燈園での久野の悟りをきっかけに執筆された小冊子『光水（旅行）漫録』については、浜島も、5.1に後述のように『躬行者総集編』がまとめられた1988年の時点で、その重要性を指摘しつつも、その詳細について十分に言及することはなかった。なお、小冊子『光水（旅行）漫録』に書かれた久野にとっての重要課題については、5.3で別途、検討する。

浜島は言及していないが、久野は、1962年8月の教育哲学者の森信三（1896-1992）の研修会で講師をつとめ、その2か月後の1962年10月5日から個人雑誌『躬行者』を発行するのである¹⁰¹。

5. 小冊子『光水（旅行）漫録』の概要

5.1 小冊子『光水（旅行）漫録』に関する先行研究

本章は、『光水（旅行）漫録』という久野庄太郎が執筆した小冊子の概要と発行の経緯について考察する。この節は、『光水（旅行）漫録』について言及した二次資料を検討する。最初に、久野の個人雑誌『躬行者』の創刊号から第100号までが1988年に『躬行者総集編』として合本された際、浜島辰雄がつけた「まえがき」を取り上げる。のちに考察するように時系列に問題があるが、この中で、初めて『光水（旅行）漫録』の冊子名と、それが書かれた背景について記述がある¹⁰²。

浜島によると、久野と浜島は、1960年の「8月のある日」あるいは「暮れ」に愛知用水公団の労働組合の高橋次郎委員長らから相談を受ける¹⁰³。1955年から5年間の工期である愛知用水の事業の完了後に、日本全国から出向者としてあつまった技術者たちに戻る場所がないという問題で、浜島は久野が「二つの方向（原文ママ）」を考えて実行したことをのべている¹⁰⁴。

一つが、「海外援助のコンサルタンツ会社を造って、そこに相当量の人を収容」¹⁰⁵することで、久野は「海外の援助会社は資金作りを考えて、息子の久野彦一」にまかせた。もう一つは、久野みずから「一年間に百億円位の予算で急速に開発を必要とする大国家的（原文ママ）な仕事を見つけ様と、（中略）全国津津浦浦を廻って、プロジェクト探しをやった」¹⁰⁶と浜島はのべている。浜

¹⁰¹ 『躬行者』の発行の経緯や内容については、柴田英知、2002、pp.52-57を参照のこと。

¹⁰² のちにのべるように『光水旅行漫録』の執筆は、1956年からはじまっており、1959年の愛知用水公団の労働組合との話の時期とは前後してしまい、矛盾が生じている。

¹⁰³ 浜島辰雄は、その編著（2005）では「[昭和]35年[1960年]夏のある日（角カッコは筆者による）」、一方、浜島辰雄（1988）では「昭和35年[1959年]暮れ」に相談を受けたと書いている。浜島辰雄編著、2005、pp.302-309。浜島辰雄、1988、2ページ目。

¹⁰⁴ 引用は、浜島辰雄、1988、2ページ目より。

¹⁰⁵ 同上。

¹⁰⁶ 同上。

島は、久野が「愛知用水をやって、スッテンラテンになって、自分の喰う事に困る程になり、何とか誰の援ま（原文ママ、援けと思われる）も借りずに匍匐上って来たところを、頼まれれば、越後からでも米掲きにとでもないが、自費で全国を廻った」¹⁰⁷という。

浜島は、久野が日本の津津浦浦をまわる中で、「其の時の仕事は、各地の開発の事業を悉く記録して人に話ができるようにしなければならない」¹⁰⁸ことから、「一つのプロジェクトを見る度に報告書を造られた」¹⁰⁹とのべている。その結果として、愛知用水の次の国家的な仕事として、同じ愛知県内の豊川用水を久野と浜島は元首相の吉田茂に進言したという記述が浜島にある¹¹⁰。

このような経緯で、浜島は、「一切を記録に残さない決心でかかられた久野さんの用水運動も事志と違う方向に進まざるを得なくなり、光水漫録として、第一号は久野さんが、直接執筆し、第二号は吉野川の計画を私が担当した」¹¹¹としている。ちなみに、浜島は久野が愛知用水の建設推進運動を始めるのをきっかけに、「用水は誰が作ったのか分らぬが良いものだ」¹¹²と、山崎延吉から教えられて毎日書いていた日記を書くのをやめたことにも言及している。

浜島は、「中でも秀逸なのは、『愛知用水と臨海工業』、『佐布里池をつくりましょう』、『高潮防潮堤をつくりましょう。』で、これらは皆実現して、日本の経済発展や、地域住民の幸の礎を築いています」¹¹³とのべた上で、『躬行者』が久野の米寿にあわせて、創刊号から第100号までが合本製本されたように、「いづれ、光水漫録も、シリーズとして、発表しなければならないと思っております」¹¹⁴とのべている。しかし、それはなされなかった。

浜島編著の2005年の『愛知用水と不老会』では、「第十四章 愛知用水着工」の「5 佐布里池の構想」の節の文頭に下記のような記述がある。ここに書かれた『光水漫録』のタイトルは、前述の1988年の『躬行者総集編』の「まえがき」に浜島が書いたものと同じである。なお、この編著においては、これ以外には小冊子『光水（旅行）漫録』についての言及はない。

久野さんは自費で『光水漫録』（「愛知用水と臨海工業」「高潮防潮堤を作りましょう」「佐布里池を作りましょう」）を16,000部刊行して地元配り、地元住民へPRにつとめた¹¹⁵。

その後、『光水漫録』について言及したのは、高崎哲郎の『水の思想土の理想』（2010）である。

¹⁰⁷ 同上。

¹⁰⁸ 同上書、3ページ目。

¹⁰⁹ 同上。

¹¹⁰ 浜島辰雄編著、2005、pp.304-305。

¹¹¹ 浜島辰雄、1988、3ページ目。ちなみに、第1号は5.2の表3のNo.1『光水旅行漫録 東奔歌日記』、第2号は、No.3『光水旅行漫録 愛知用水第一回総代さんへ捧ぐ』に該当する。

¹¹² 同上書、1ページ目。

¹¹³ 同上書、3ページ目。浜島があげた3つの冊子は、それぞれ後述の5.2の表3のNo.8『光水漫録 第八編 愛知用水と臨海工業』、No.11『光水漫録 第十一編 佐布里池をつくりましょう』、No.6『光水（旅行）漫録 高潮防潮堤をつくりましょう』に該当すると考えられる。

¹¹⁴ 同上書、3ページ目。

¹¹⁵ 浜島辰雄編著、2005、p.284。

[昭和] 32 年 [1957 年] 6 月、久野は自費でパンフレット『光水漫録』を 16000 部刊行し地元の各家庭などに配布した¹¹⁶。『漫録』の骨子は、①愛知用水と臨海工業を考えましょう、②工業地帯を守るため高潮防潮堤を作りましょう、③工業用水確保に佐布里池を（現知多市）を作りましょう、であった¹¹⁷。

高崎の記述では、『光水漫録』が一冊本でテーマが三つ含まれる、あるいは 3 冊であるかのようにとれるが、実際には、浜島がいうようにそれぞれ別々の冊子である。しかも、内容をみると浜島が『躬行者総集編』の「まえがき」（1988）と『愛知用水と不老会』（2005）で選んだ 3 冊をそのまま紹介しているように思われる。

このように先行研究では、久野が小冊子『光水（旅行）漫録』を著したことと、いくつかのタイトルについての言及がある。しかし、その全体や個々の冊子についての研究は管見の限りない。

5.2 小冊子『光水（旅行）漫録』のタイトル一覧

本節は、久野庄太郎の小冊子『光水（旅行）漫録』の全体について考察する。国立国会図書館サーチによれば、後述の表 3 の No.9『光水漫録 第九編 臨海工業と三町合併』のみが愛知県立図書館に所蔵されており、その他の機関にこの冊子の登録はない¹¹⁸。筆者は幸い、浜島辰雄の四男の浜島十志雄氏の厚意により、浜島の遺品から関連資料の閲覧と一部資料の提供を受けた¹¹⁹。

筆者が閲覧したものと、二次資料で存在が言及されているものを合わせれば、『光水（旅行）漫録』は全部で 16 冊になる。これは発行時期や発行所から表 3 のように 2 つの群にわけることができる¹²⁰。筆者は、No.6『光水（旅行）漫録 高潮防潮堤をつくりましょう』を入手していないが、存在したものとして扱う¹²¹。

タイトルには、編数が書かれたものと書かれていないものがある。「第〇編」と編数の記載があるのは、第八編以降である。しかも第十二編は、4 つある。その混乱を整理するために浜島の記述¹²²を参考に、第十二編を No.14 の『愛知用水と不老会』であると特定した。その上で、公式と考えられる編番号を表の No.の右隣に「公式編数」として付け加えた。その結果、公式編数がつかないものが 4 冊となった。

¹¹⁶ 1957 年 6 月に出版されたものが具体的にどの号にあたるのかは不明である。しかし、後述の 5.2 の表 3 によると、①が No.8『光水漫録 第八編 愛知用水と臨海工業』に、③が No.11『光水漫録 第十一編 佐布里池をつくりましょう』であると考えられるため、消去法で 1957 年 6 月発行のものが『高潮防潮堤を作りましょう』である可能性が高い。

¹¹⁷ 高崎哲郎、2010、pp.203-204、角カッコは筆者による。

¹¹⁸ 国立国会図書館サーチ（2022 年 4 月 16 日検索）。

¹¹⁹ 浜島辰雄の没後に、遺族の浜島十志雄氏の許可の元、郷土史家の茶谷和夫氏が浜島の遺品調査をおこなった。その過程で、浜島辰雄の書斎に散在していた『光水（旅行）漫録』の原本などが発見されたとのことである。

¹²⁰ 編数にダブリがあるため識別用の No.を発行日順に記載した。なお発行年の和暦を西暦に直した。

¹²¹ 5.1 で前述したとおり、浜島辰雄と高崎哲郎が、この小冊子の存在に言及しているため、実際に存在したものとして扱った。発行日の推定は、注 116 を参照のこと。

¹²² 浜島辰雄、1988、3 ページ目。

表3 小冊子『光水（旅行）漫録』のタイトル一覧表

No.	公式編数	タイトル（構成・頁数など）	発行日	発行所／判型
第1群 一燈園印刷部による発行分				
1	第一編	『光水旅行漫録 東奔歌日記』 （表紙、表紙裏、本文 47 頁）	1956.6.15	一燈園印刷部 ／B6 製本
2	第二編	『光水旅行漫録 天香さん御案内の弁』 （表紙、本文 10 頁、奥付）	1956.7.15	一燈園印刷部 ／B6 製本
3	第三編	『光水旅行漫録 愛知用水第一回総代さんへ捧ぐ』 （表紙、表紙裏、本文 29 頁、奥付）	1956.8.20	一燈園印刷部 ／B6 製本
4	第四編	『光水旅行漫録 愛知用水公団設立満一か年に際して』 （表紙、表紙裏、本文 14 頁、奥付）	1956.10.25	一燈園印刷部 ／B6 製本
5	第五編	『光水旅行漫録 工業用水編・酉の新年』 （表紙、表紙裏、本文 26 頁、奥付）	1956.12.30	一燈園印刷部 ／B6 製本
6	第六編	『光水（旅行）漫録 高潮防潮堤をつくりましょう』 ※未入手	1957.6 （推定）	不明
7	第七編	『光水旅行漫録 我がためとこの世のためとの愛知用水』 （表紙、表紙裏、本文 16 頁、背表紙の裏）	1957.12.25	奥付欠落 ¹²³ ／ B6 製本
第2群 久野庄太郎が一燈園とは別に独自に発行したもの				
8	第八編	『光水漫録 第八編 愛知用水と臨海工業』 （表紙、本文 32 頁、地図 1 枚）	1958.12.15	交友社／ A5 製本
9	第九編	『光水漫録 第九編 臨海工業と三町合併』 （表紙、表紙裏、本文 34 頁、図面 1 枚）	1959.7.5	刈谷謄写印刷 所／A5 製本
10	第十編	『光水漫録 第十編 愛知用水といね』 （表紙、表紙裏、本文 16 頁）	1959.11.25	交友社／ A5 製本
11	第十一編	『光水漫録 第十一編 佐布里池を作りましょう』 （表紙、表紙裏、本文 10 頁）	1960.4.15	交友社／ A5 製本
12	—	『光水漫録 第十二編 愛知用水といね（その2）』 （表紙、本文 6 頁）	1960.8.1	交友社／ A5 製本
13	—	『光水漫録 第十二編 愛知用水復元利用 その一』 （表紙、本文 10 枚）	1961.6.8	記載なし／ タイプ打ち B5 未製本
14	第十二編	『光水漫録 第十二編 愛知用水と不老会』 （表紙、表紙裏、本文 39 頁、別紙 2 枚）	1962.2.20	三祐株式会社 社会事業部発 行交友社印刷 ／A5 製本
15	—	『光水漫録 第十二編 知多工業団地を作りましょう』 （表紙、表紙裏、本文 16 頁、奥付）	1969.4.1	久野庄太郎 幅印刷／ B5 製本
16	—	『第三愛知用水計画 久野庄太郎』 （表紙、本文 9 頁、図面 1 枚）	1987.11 月 以降	記載なし／ A5 製本

（出典：筆者作成。No. 6 のみ未入手）

まず、タイトルの揺らぎについて検討する。タイトルには『光水旅行漫録』と『光水漫録』が混在している。No. 1 から No.5 および No.7 については『光水旅行漫録』とタイトル中に記載がある¹²⁴。No.8 以降は『光水漫録』となっている。本稿では、これらの冊子の全体を表すときには、『光水（旅行）漫録』と書き記すことにする。

なお、『光水（旅行）漫録』のタイトルは、山崎延吉の「我農漫録」という雑誌投稿コラムの影

¹²³ 体裁や活字などから一燈園印刷部の可能性が高いと思われるが、筆者は奥付のページのみコピーをし忘れてしまったので、そうでない可能性もある。なお、オリジナルの所在は現在、不明である。

¹²⁴ No.6『高潮防潮堤をつくりましょう』は現物がいないため、「光水旅行漫録」なのか「光水漫録」なのか不明である。

響を受けていると考えられる。岡田洋司は、山崎が大阪農業学校時代から 1899 年に創刊された『新農報』という雑誌に、本名あるいは「我農生」という号で、大きく分けて 3 つのコラムを投稿したことをのべている。第一が「論説」で、第二が農業技術に関する文章、第三が「我農漫録」という評論風の文章であった¹²⁵。久野が、山崎の「我農漫録」を知らなかったとは考え難く、西田より与えられた「光水」の号と山崎のコラム名を組み合わせ、冊子のタイトルを『光水（旅行）漫録』にしたと思われる。

次に、これらの冊子の発行所に着目する。No. 1 から No. 5 は、1956 年に集中して発行されており、発行所は一燈園印刷部となっている。No.6 の発行所は不明ではあるが、No.7 もまた一燈園印刷部のものである可能性が高い。後述 6 で考察するように No.1 から No.5 は一連のものと考えられ、No.7 も発行所から第 1 群と仕分けする。No.8 以降は、久野が独自にさまざまな印刷所で発行している。これらを第 2 群と仕分けする。第 1 群の判型は、未入手の No.6 以外のすべてが B6 判で印刷製本されている。第 2 群の判型は、原則 A5 判で、No.13 を除き印刷製本されている¹²⁶。

5.3 小冊子『光水（旅行）漫録』の 4 つのテーマ

本節は『光水（旅行）漫録』が、いかなるテーマで作成されたのかを検討する。表 3 にあげられた『光水（旅行）漫録』のそれぞれの冊子は、基本的に一つのテーマで執筆されており、そのテーマと対象者がわかりやすい。各冊子に書かれた内容と、拙稿でふれた個人雑誌『躬行者』の主要なテーマ¹²⁷との関連性をふまえ、『光水（旅行）漫録』のテーマを 4 つとその他に分類した。それは、1.農業開発地域の視察旅行、2.愛知用水への提言、3.愛知臨海工業地帯の誘致、4.不老会、その他である。各冊子のテーマと誰に向けて書かれたのかを表 4 にまとめた。冊子の No.は、表 3 に準ずる。

表 4 小冊子『光水（旅行）漫録』の主要なテーマと想定される読者

No.	テーマ	想定される読者	該当する冊子
1	農業開発地域の視察旅行	愛知用水土地改良区、愛知用水公団	No. 1、No. 3
2	愛知用水への提言		
2-1	愛知用水地域住民の人心開発	愛知用水地域の住民	No. 2
2-2	愛知用水のリーダー向けの心得	愛知用水土地改良区、愛知用水公団	No. 1、No. 3、No. 4
2-3	営農方法の改善	愛知用水の受益農民	No. 7、No. 10、No. 12
3	愛知臨海工業地帯の誘致	愛知臨海工業地帯誘致の関係者や該当する地域住民	No. 5、No. 8、No. 9、No. 11
4	不老会	不老会の関係者	No. 14
—	その他	不明	No. 6（未入手）、No. 13、No. 15、No. 16

（出典：筆者作成）

¹²⁵ 岡田洋司の記載をもとにまとめた。岡田洋司、2010、pp.46-47。

¹²⁶ 第 2 群の No.13（未製本）と No.15（製本）は B5 版である。

¹²⁷ 『躬行者』のテーマは、「第 1 期、篤農家の久野庄太郎、第 2 期、愛知用水の久野庄太郎、第 3 期、郷土開発と父総会の久野庄太郎、2-1 愛知海道（第二東海道）2-2、不老会、2-3、海外旅行、その他、処世訓と雑感」であった。なお愛知臨海工業地帯の誘致は、愛知海道（第二東海道）に含まれる。柴田英知、2002、p.55。

4つのテーマごとに、以下に該当する冊子の概要をのべる。最初が、テーマ1の「農業開発地域の視察旅行」の報告である。これは、愛知用水の関係者を対象としており、特に愛知用水土地改良区と愛知用水公団のリーダー向けの具体的な現場からの提言である。No.1『東奔歌日記』は、久野庄太郎が西田天香に同行し途中から単独で行った東北地方の現地視察の記録である。No.3『愛知用水第一回総代さんへ捧ぐ』は、久野が浜島辰雄と二人でおこなった近畿地方の現地調査の記録で、その目的は、No.1『東奔歌日記』と同じであると考えられる¹²⁸。なお、この2冊については、5.1にのべたように、浜島も言及している¹²⁹。

テーマ2の「愛知用水への提言」には、2-1 愛知用水地域の住民向けのもの（No.2）、2-2 愛知用水土地改良区の総代や愛知用水公団などの愛知用水のリーダー向けのもの（No.1、3、4）、そして2-3 愛知用水の受益農民向けのもの（No.7、10、12）がある。テーマ2-1のNo.2『光水さん御案内の弁』は、一燈園の西田天香と久野の悟りを地域住民に紹介するものである。テーマ2-2のNo.1『東奔歌日記』は、東北地方の視察旅行、No.3『愛知用水第一回総代さんへ捧ぐ』は、近畿地方の視察旅行で得た教訓などを伝えるものである。No.4『愛知用水公団設立満一カ年に際して』では、より一層の受益者間での相互啓蒙活動を呼びかけるものである。テーマ2-3のNo.7『我がためとこの世のためとの愛知用水』では、農業用水の有効利用とビートの栽培など営農改善についてふれている。そして、No.10とNo.12の『愛知用水のいね』では、久野が設置した試験田による稲作と裏作のビート栽培を具体的に紹介している。

テーマ3の「愛知臨海工業地帯の誘致」に関して、No.5『工業用水編・西の年』では、愛知臨海工業地帯の誘致の必要性について、No.8『愛知用水と臨海工業』では、なぜ愛知臨海工業地帯の誘致をしなければならないのかを愛知用水と関連づけて説明している。No.9『臨海工業と三町合併』では、愛知臨海工業地帯誘致のその後の進捗や愛知用水分担金の軽減、自主性とは何かなどについて説明している。そして、No.11『佐布里池をつくりましょう』では、工業用水の確保のために必要となった調整池である佐布里池について該当地域の住民向けに、その建設の必要性和立ち退き後の生活などについて提言している。これらの冊子であつかわれたテーマは、4.3で久野が「大乘愛知用水観」として記述した「農民の負担の軽減と用水の多目的利用」のための「臨海工業地帯造成計画」の推進に、直接関係するものであると考えられる。また、5.1に前述したように、浜島辰雄と高崎哲郎も、No.8とNo.11のタイトルに言及している。

テーマ4の「不老会」については、No.14『愛知用水と不老会』の一冊のみで、久野が1962年1月21日の不老会設立総会で語った言葉と関連資料などを冊子としてとりまとめたものである。

その他に分類した、No.13『愛知用水復元利用』、No.15『知多工業団地をつくりましょう』とNo.16『第三愛知用水計画久野庄太郎』は、その内容や情報の受け手がはっきりとしなかった。また、No.6『高潮防潮堤をつくりましょう』については、5.1に前述したように、浜島と高崎もタイトル

¹²⁸ 久野庄太郎は、『東奔歌日記』の反響として、「次号を早く出せとか、西奔歌記をまつ」という言葉を紹介している。久野庄太郎、1956c、3ページ目。

¹²⁹ 浜島辰雄、1988、3ページ目。

に言及していることから存在するものとして扱っているが、未入手で内容がわからないため、その他に分類した。

上述の4つのテーマのうち、テーマ3の「愛知臨海工業地帯の誘致」と、テーマ4の「不老会」については、『人間文化研究』第37号の拙稿で、個人雑誌『躬行者』の重要なテーマとして明らかにした「愛知臨海工業地帯の誘致」と「不老会」についての記事と連続性を持つものである。なお、個人雑誌『躬行者』のテーマとの異同については、後述の6.4で検討する。

4.4でふれた一燈園から下山後の久野の活動のうち、もっとも重要なものはテーマ3の「愛知臨海工業地帯の誘致」にかかわることであった。しかし、実際に『光水（旅行）漫録』であつかわれたテーマをみると、愛知臨海工業地帯の誘致にとどまらない幅広い活動を久野がしていたことがわかる。これは、浜島や高崎哲郎などの先行研究が言及していた冊子のタイトルから想像されるテーマの範囲を大きく上回るものであった。

6. 小冊子『光水（旅行）漫録』の成立とその役割

6.1 小冊子『光水（旅行）漫録』の誕生と一燈園

本章は『光水（旅行）漫録』の成立とその役割を、主に5.2の表3に示した第1群の一燈園印刷部発行の冊子（No.1からNo.5）¹³⁰に書かれた内容の分析と、個人雑誌『躬行者』の内容の比較などを通じて明らかにする。

本節は、『光水（旅行）漫録』が書かれた経緯と一燈園とのかかわりについて考察する。まず、No.1『光水旅行漫録 東奔歌日記』という久野庄太郎の東北旅行の記録をとりあげる。この冊子は、5.1で前述したように浜島辰雄も言及している。ただし、旅行の内容そのものではなく、この冊子が書かれた経緯を中心に分析する。

久野は、一燈園への隠栖をきっかけに退所後も一燈園に足しげく通うようになる。それは、西田天香がこの冊子の冒頭によせた「東北の旅を共にして」という文章の中で「（前略）不思議な摂理で、道の上で一段深くなり、此頃一飛躍をされたことから、山科一燈園へよく来られ、色々語りあっている」¹³¹と書いていることから裏付けられる。引き続き、西田の言葉を引用すると、久野の「郷里〔愛知県知多郡〕へも呼ばれたりするうち、米沢の鷹山公が師事された細井平洲先生の話などから、米沢行を共にすること」¹³²になったという。

この旅行は、1956年5月25日に東京駅で、久野と西田が東京光友会のメンバーに出迎えられたところから始まる。同夜、高田馬場で光友に講演をした後、翌日から、久野と西田と光友で成蹊大学教授の丹羽孝三の3人は、埼玉県秩父、山形県米沢市などの光友を訪ねて廻った。久野は、

¹³⁰ No.7『光水旅行漫録 我がためとこの世のためとの愛知用水』については、注123で書いたように一燈園で印刷された可能性が高いが、No.1からNo.5で顕著にみられた一燈園への言及が全くなかったことから、今回の検討の対象外とした。

¹³¹ 久野庄太郎、1956a、表紙裏。

¹³² 同上。

5月29日に西田らと別れてひとりで仙台と山王海、盛岡、岩堂などの農業開発地域を訪問した。

久野は、まえがきの「御挨拶」の中で「予ねて御尊台様の御力添により、我が愛知用水も追々具体化に向かいつつあり」と書き出し、「尚将来色々重要なる問題が沢山ありますのであなた様が旧倍の御協力に依り速かに完成への御指導をお願い致し度い」ために「今回参考の為に東北の農地開発の御様子を拝見し度い」とのべている¹³³。つまり久野は、西田の米沢行き旅行にただ同行するだけではなく、独自の目的を持っていた。その目的を下記のように説明している。

（二）東北旅行の目的

私は技術者でなし、又事務屋でもなし元より政治家でもない、その私が何を見るために方々へ旅行するか、次のような目的です。

- 一、何々地区の開発必要性
- 一、何々地区開発後の利用収益計画
- 一、何々地区開発事業促進運動の経過
- 一、何々地区民がその開発事業に対する受入態勢熱意云々
- 一、その他世話人の態度等

こんな様な事を見聞させて頂き度いと思って旅行します。出来れば日本中廻り度いが、少くとも愛知用水公団に来て居て下さる人々の前任地丈けは拝見し度いと思って居ります¹³⁴。

当初予定では、引き続き青森や秋田を巡る予定であったが、6月1日の朝に岩堂ダムの現場から下山する途中の坂道で、久野が乗ったバスが断崖から転落してしまった。久野は、断崖の途中で止まったバスから自力で抜け出し、九死に一生を得た¹³⁵。

久野が事故にあつて考えた再起の自誓を紹介する¹³⁶。久野は、「命拾いをしたのでこの世に御用があるのだ」と思い、「寧ろこれからが私の本舞台かなと云うような気がしてならぬ」という。そして「これが天道様から誰もが一度は與えられる貴重な試練の機会か、それに気のついたもの丈けがよい仕事がさせて貰えるのかもしれんぞ」と考えてうれしく思うのであった。

久野は、この『光水旅行漫録 東奔歌日記』を書いた理由として「傷は極めて小さく（中略）両足に全治一ヶ月ぐらいの打撲傷を負い」、「止むを得ず帰宅し毎日寝転んで居ります」とのべた上で、「この負傷で暇閑を得たので東北旅行日記を書いて見ようかと思立ちました」とのべている¹³⁷。

この記述によると、この旅行は、先に5.1で紹介した浜島がのべた「全国津津浦浦を廻って、プロジェクト探し」をすることが直接の目的ではなかった。久野の関心は、他の農業開発地域の「開発事業推進運動の経過」、「その開発事業に対する受入態勢熱意云々」や「その他世話人の態

¹³³ 引用はすべて、久野庄太郎、1956a、p.1より。

¹³⁴ 同上書、p.6。

¹³⁵ この節は、同上書を参考に筆者がまとめた。

¹³⁶ 下記の引用はすべて、同上書、p.43。

¹³⁷ 引用はすべて、同上書、p.3より。

度等」などであり、愛知用水土地改良区や愛知用水公団などの関係者に、「将来色々重要な問題」の「参考」になる情報を得るための視察であったと考えられる。

しかも、愛知用水の工事で知り合った愛知用水公団などの農林省（現農林水産省）や県などの職員から紹介してもらった農業開発地域の工事現場の職員や土地改良区などの地元のリーダーたちを訪ねるといのかたちで、この旅行がはじまったことが書かれていた。また、交通事故にあつて時間ができたので書いて見ようと思い立ったという偶然の要素も見受けられる。結果的には、浜島がいう目的に資することになったのであるが、久野にしてみれば、今後の愛知用水の問題をどのように解決していくのが最重要課題であったのである。

次に、第1群の冊子が一燈園で印刷された経緯について検討する。No.1 から No.5 の冊子の奥付に「著者編集者久野庄太郎」とあり、印刷者が「社団法人（光泉林）一燈園印刷部」であるため、一燈園に調査を依頼した¹³⁸。その結果、久野が書いた文章が、一燈園の機関誌『光』などの記事として残されていることや、久野の私信のいくつかが保存されていることがわかった。しかし『光水（旅行）漫録』の現物や、その出版記録は残されていなかった。

まず、『光水旅行漫録 東奔歌日記』が一燈園で印刷された理由を考察する。宮田昌明氏によると一燈園印刷部は一燈園の機関紙『光』などを印刷する部局で、現在は一燈園出版部となっている。一燈園印刷部（現出版部）は主に西田天香や同人が執筆した著作を印刷、出版しているそうである。その内容は、同人や光友向けに限られず、一般向けのものもあった。また、西田や同人だけではなく、光友による印刷、出版もあったとのことである。しかも、一燈園の話そのものでなくとも、印刷を依頼されれば単純に仕事として引き受けた可能性もあるとのことである¹³⁹。『光水旅行漫録』（No.1 ～5、No.7）には定価の記載はなく、明らかに商業出版ではないと思われる。詳細は不明であるが、おそらく久野が費用を負担したと考えられる。

この冊子には、そもそも西田の誘いで光友を訪ねる東北旅行を前半部に取り上げていること、久野が「後記」に一燈園の説明書きをつけていることなど、一燈園に関係のある記述も含まれているが、前述のように本来、愛知用水の関係者向けの冊子であった。おそらく、久野は破産状態で活動が制限されており、出版や冊子の発送などが公然とできない状況であったことから、一燈園印刷部を活用したと考えられる¹⁴⁰。ここに、久野と一燈園の西田との交流の深さが感じられる。

6.2 言語化された久野庄太郎の悟り

本節は、4.3 でふれた久野庄太郎の一燈園での「大乘愛知用水観」の悟りが、具体的に言語化さ

¹³⁸ 一燈園の宮田昌明氏に、事前に関連資料の調査をお願いし、2018年3月8日に現地調査をおこなった。ここに記して感謝を申し上げる。

¹³⁹ 宮田昌明氏との2022年5月26日付メールのやり取りをまとめた。久野が一燈園の礼堂で話をしたこともあり、西田以外の同人とも交流があったことも聞き取りで確認していただいた。当時、一定の条件を満たした人のみに出版を許すような出版基準はなかったと思われるため、「西田天香の特別な配慮」がなくても出版は可能と思われるという見解を示された。

¹⁴⁰ 久野格彦氏によれば、久野庄太郎は破産の身で、表だって小冊子の出版や配送が出来なかったため、一燈園の名義を使わせてもらったのではないかと、とのことである。

れたものとして、No.2『光水旅行漫録 天香さん御案内の弁』をとりあげる。この号は、久野が西田天香に「近頃びつたり、と御厄介になって」いることや、「近頃一燈園に於て静かにお話をきき又考えても見」たこととして、「1 私の欠点」、「2 消極即大積極」、「3 一燈園の精神」など、合計6つの気づきをあげている¹⁴¹。

特に重要なのが、5つ目であろう。久野は、「第五、私の幼稚な発願」として、「今迄愛知用水さえ出来ればよいと思って努力して」来た。「成程愛知用水は出来ねばいかんが、たとえ出来ても、これを保全する事の必要と、その仕方を考えず」にいた。「これでは駄目だ。寧ろその方を先にせねばならん、と云うことをこの度一燈園に御厄介になつてさとりました」といっている¹⁴²。この内容こそが、久野が『躬行者』第66号で語った小乗愛知用水観と大乘愛知用水観の一例を示している。つまり、「俺の用水と思って」「愛知用水さえ出来ればよい」というのが小乗愛知用水観で、出来上がった愛知用水を「保全する事の必要とその仕方」を考えることが大乘愛知用水観である。

引き続き久野は、「争いのない世の中が作り度い（下線は傍点を示す）」¹⁴³という一燈園精神をもととして定めた「内心十戒」¹⁴⁴をあげている。これは「1. まず私が悪かったと思う（懺悔）」、「2. 怒るまい」、「3. わがままをいうまい」、「4. いばるまい（小使いのつもりで暮らす）」など、久野が新たに愛知用水の建設推進運動に取り組むにあたっての決意であり、西田と一燈園にふれたからこそ生まれた悟りのひとつの表れであるといえよう。そして「微力乍ら、こうして平和を祈りつゝやがて出来上る愛知用水を活用して楽しい生活が続けたい」¹⁴⁵と、本人いわく「小さい乍ら発願」¹⁴⁶したのである。

ここでは詳細に検討することはできないが、久野の思考の中に「平和」という言葉が存在することに注目したい。そして「結び」で、これまで『進んでとる』と云う事を常としてきたが、一燈園で『退いて反省する』と云うことを考える機会を得たとのべている¹⁴⁷。この冊子には、後に1966年に発行された『躬行者』第66号にも書かれていた久野の「大乘愛知用水観」が、より具体的に書かれていたことがわかる。

久野は、この悟りと発願をふまえ、一燈園の西田を、郷里である知多の八幡から知多町、知多郡、さらに愛知用水地域全部に案内し巡回する活動を始めた。久野は、西田の話を聞きに集まった農民や住民に、一燈園の案内とみずからの「大乘愛知用水観」の悟りを書いたこの冊子を配布した。この事実は、『躬行者』にも書かれておらず、この冊子の存在によって初めて明らかになった。

¹⁴¹ 引用はすべて久野庄太郎、1956b、p.1より。ちなみに6つとは、1、私の欠点、2、消極即大積極、3、一燈園の精神、4、私は少しずつ解って来た、5、私の幼稚な発願、6、考案の具体化である。この考案の具体化が、西田を連れて愛知用水地域全部に招待して「争いのない社会をつくる運動」をすすめることであった。久野庄太郎、1956b、p.7。

¹⁴² 引用はすべて久野庄太郎、1956b、p.5より。

¹⁴³ 久野によるまとめ。「第三 一燈園の精神」を参照のこと。久野庄太郎、1956b、pp.2-3。

¹⁴⁴ 内心十戒「1、まず私が悪かったと思う（懺悔）、2、怒るまい（若しも相手が怒るなら、それは私が怒らすのだと思う）、3、我まゝを云うまい（自分一人の世の中でない）、4、いばるまい（小使いのつもりで暮らす）、5、むさぼるまい（知足）、6、野心をおこすまい（やり手の多いことはやらぬ）、7、力一杯 努力して報を求めぬ（物心両面に付いて）、8、冗費節約（禁酒、禁煙、並に必要以外の消費はせぬ、知恵と身と時間の有効利用）、9、少しでも 世の為めになりたい（平和運動、愛知用水完成）、10、兎に角争いの元を減らす（自分の力の及ぶ丈に）。久野庄太郎、1956b、pp.6-7。

¹⁴⁵ 久野庄太郎、1956b、p.7。

¹⁴⁶ 同上。

¹⁴⁷ 同上書、p.8。

なお、No.2『光水旅行漫録 天香さん御案内の弁』は、1956年8月に刊行された『光』427号に「光水旅行漫録」のタイトルで、丸ごと転載されている¹⁴⁸。この記事の「編集附記」では、「最近ある心境の変化から一燈園に飛び込み、親しく天香さんと一燈園生活に触れ、スバラシイ生活の転向を経験されたことは、本誌の天香さんの文に度々紹介された」¹⁴⁹ことを伝えている。

6.3 啓蒙の手段としての小冊子『光水（旅行）漫録』

本節は『光水（旅行）漫録』のNo.3からNo.5が書かれた経緯と目的や、一燈園とのかかわりなどについて検討する。

No.3『光水旅行漫録 愛知用水第一回総代さんへ捧ぐ』は、近畿地方の農業開発地域の視察の記録である。5.1に前述のように、浜島辰雄も言及している。ここでは、視察内容ではなく、なぜ書かれたのかを検討する。久野庄太郎は「足が不自由なら、それで出来る分丈の事を、この時でなくてはやれぬ事を、この時にやろうと思つて近畿地方の農業開発を視察に出かけました」¹⁵⁰といている。そして「私の一人旅行はまだあぶないと云うので、畏友浜島〔辰雄〕さんが御同行して」¹⁵¹くれたという。久野は、前後文と写真と歌を担当しており、本文は浜島が執筆している。

久野は、「後記」で「第一回愛知用水土地改良区の総代200名様に呈し度い」とした上で、「形の上での御役名はなくても旧倍の御協力御指導が頂き度い」とのべ「横の連絡に依って必要な用水情報は申上げたい」と思うので「我が用水として今迄同様の御力添を御願ひ致します」とのべている¹⁵²。このように愛知用水土地改良区の総代が主な送付先であることが書かれている。同時に、表紙裏に西田天香の言葉集よりの引用があり、久野が、序文の最後に「京都山科一燈園にて」と書いているところに、一燈園との接点が見受けられる。

No.4『光水旅行漫録 愛知用水公団設立満一カ年に際して』を、書かれた目的と送り先に注目して分析する¹⁵³。その内容は、「物そのものは本来誰のものでもない。凡て全体のものである。／得んとする者は亡び、捧ぐる者は残る。／（中略）／「自分はもうけるから……」の言いわけでする贅沢は、どこかできつと清算される。／（後略）」などの西田の言葉集と、愛知用水の受益者たちに話をする西田の写真から始まる¹⁵⁴。

久野は、愛知用水公団設立の一周年にあたり、進捗に感激しつつも「油断大敵」ということで、「絶対に用水が来る迄は心をゆるめてはならない」という。そして「今後の期成運動は水源地や木曾川下流や県や中央へばかり」ではなく、「受益者相互啓蒙運動」が重要であると説く。そして、「受益地域内の民衆」と相談し賛成を求めるために、何百回と講演をしてきた経験を「話せば解

¹⁴⁸ この資料の存在は一燈園の宮田昌明氏に教示いただいた。

¹⁴⁹ 一燈園、1956、p.35。なお、文中の「天香さんの文」については、未確認である。

¹⁵⁰ 久野庄太郎、1956c、p.4。

¹⁵¹ 同上。

¹⁵² 引用はすべて、久野庄太郎、1956c、p.38より。

¹⁵³ 以下の文中のカギカッコは、すべて久野庄太郎、1956dからの引用である。

¹⁵⁴ 久野庄太郎、1956d、pp.1-2。

る」、「今日なお反対する人は」などの章のタイトルをキーワードとして、詳しく語っている。

次に、愛知用水事業が自分の村のかんがい用水、排水路、農道、区画整理などの問題と関連していることをのべ、愛知用水の一環でやるべきことを説明した上で、「受益者が腹へ入れる迄説明」することを用水の受益者団体である期成同盟会や土地改良区の理事や総代などに呼びかけている。久野は、愛知用水公団の役割や重要さを認識しつつも、「公団人に任せ切りにすべきでない」と記述している¹⁵⁵。そして、「用水が出来たら帰つてゆく立場の人々に、あまり気骨を折らせないで、この土地に住んでこの用水で生活する人々の協力に依って事業が（原文ママ）すゝめたい、と思います」¹⁵⁶とのべている。おそらく、この冊子は、愛知用水土地改良区の総代が主な送付先であると思われる。

最後に、No.5『光水旅行漫録 工業用水編・酉の新年』を取り上げる。久野は、まず愛知用水の経済効果の問題に世間の関心が集まっていること、愛知用水公団や愛知用水土地改良区が農業利水計画について尽力していることをのべた上で、「自由の立場にあつて愛知用水を思う私達は更に、一步をすゝめて総合計画の立場」¹⁵⁷から考えたいという。引き続き、愛知臨海工業について説明を加えていくが、本稿では、その内容の分析はおこなわない¹⁵⁸。

久野は、5回にわたって発行してきた『光水旅行漫録』の影響について言及している。No.5の「後記」では、「少子（原文ママ）の願う所は、用水のため御協力を頂いて居るあなた様に対して少しでも新しい用水の近況報告と連絡申し上げて御指導を頂くための道を開いておき度い等の事」であったとのべている。そして、「貧しき資を以つて数回に及びましたが、その甲斐あつて、多くの方々からのぞみにあまる御返書を頂き実に感動に堪え」ないとのべている¹⁵⁹。

また久野は、「各方面の用水御恩顧の方々、用水公団、土地改良区、同盟会、地元等相互の連絡上の空白を一寸でも埋め得た事は本懐でありました」とのべた上で、「これが縁となつてか旧年来用水だよりが発行される事になったことを伝えている。そして「将来はその紙上を拝借致しまして御意を得度い」ことと、「本子（原文ママ）の送呈は特別の場合の他一応休みます」としめている¹⁶⁰。「用水だより」とは、愛知用水土地改良区の日高啓夫理事長発行による『愛知用水だより』という月刊誌のことである。第1号は1956年12月10日に発行されている¹⁶¹。ただし、実際に久野の『光水旅行漫録』の影響であるかどうかは確認が必要である。

このように、No.1からNo.5の一連の『光水旅行漫録』は、久野が西田天香と一燈園に出会うことによって生まれたものであったことが、明らかになった。

¹⁵⁵ 久野は、1956年度の愛知用水期成同盟会の推進計画の中で、却下されたものの「相互啓蒙を第一としてゆく事」を主張した。そして、前述の3.4でもふれた内容と同じこと、つまり「愛知用水公団の在り方を監督せねばならんと、公式の席上で幾回も発言して上層部の人々の不興」を蒙ったことを「六、私の失言」という章に記述している。久野庄太郎、1956d, pp.11-12。

¹⁵⁶ 久野庄太郎、1956d, p.13。

¹⁵⁷ 久野庄太郎、1956e, p.6。

¹⁵⁸ 愛知臨海工業地帯の誘致については、5.3の表4が示すとおりNo.8、No.9、No.11や『躬行者』第6号でも語られている。その重要さに鑑み、別途、考察するべきだと考える。

¹⁵⁹ 引用はすべて、久野庄太郎、1956e, p.26より。

¹⁶⁰ 同上。

¹⁶¹ 愛知用水土地改良区、1956。

6.4 個人雑誌『躬行者』との比較

この節は、小冊子『光水（旅行）漫録』と個人雑誌『躬行者』の関係性について考察する。検討項目は、書かれた経緯、テーマ、対象者などである。それらの内容を、以下の表5に整理した。

執筆者は同じでも、読み切りの小冊子（パンフレット）と月間の個人雑誌という様式の違いが大きく、書かれた経緯、テーマ対象者など、ほとんどの項目で異なることがわかる。

表5 小冊子『光水（旅行）漫録』と個人雑誌『躬行者』の比較表

項目	小冊子『光水（旅行）漫録』	個人雑誌『躬行者』
執筆者	著者編集者 久野庄太郎	主宰 久野庄太郎
書かれた経緯	1956年5月に西田天香に同行して東北旅行に行ったことがきっかけ。愛知用水の今後の参考になる内容を記述した。	1962年8月に出会った森信三の一人雑誌の理念に共感して、「自分がやってきたこと、やっていること、やりたいこと」を記述した。
テーマ	1. 農民の負担金を減らす、2. 用水の多目的利用という「大乘愛知用水観」にもとづき、一冊ごとにひとつのテーマの読み切りで、1. 農業開発地域の視察、2. 愛知用水への提言、3. 愛知臨海工業地帯の誘致、4. 不老会などを語った。	月刊の個人雑誌として、4つのコラムにテーマをかき分けた。主なテーマは、1. 篤農家時代、2. 愛知用水の建設推進、3. 愛知海道（第二東海道）の建設推進（愛知臨海工業地帯の誘致を含む）、4. 不老会、5. 久野の処世訓などであった。
対象者と発行部数	愛知用水関係者（期成会、土地改良区、公団）、地元民など。発行部数は不明。冊子によって異なると考えられる。200部から16,000部という数字があるが精査が必要。	日本全国の愛知用水、愛知海道（第二東海道）や不老会に関係する宮家、政治家、中央官庁の官僚、大学関係者、農民、識者などが対象である。時期によって部数が異なり、約8,300部から最大でも16,500部ほど。
発行期間と頻度	1956年6月から1987年まで、不定期刊で16冊を発行。	1962年10月から1971年2月まで原則、毎月5日に、100号まで発行。
印刷所と判型、ページ数	一燈園印刷部：B6判（No.1～No.5、No.7）その他：A5判、B5判（No.8～No.16）。ページ数：本文のみで6～47ページと冊子によって異なる。	愛水館：タブライド判（B5判見開き）。ページ数：原則4ページ。6ページもまれにある。

（出典：筆者作成。表3を参照。『躬行者』に関して柴田英知、2002、pp.52-57を参考にした）

久野庄太郎が大乘愛知用水観にもとづき、愛知用水への提言や愛知臨海工業地帯の誘致などの、ひとつひとつの課題を関係者に訴えかけるためには、まとまった文章を書くことができ、ひとりひとりに手渡ししやすい小冊子の形態の方が好都合であったと考えられる。しかし、小冊子であったため、公立図書館などの収集の対象とされにくかった。

また、愛知臨海工業地帯の誘致や不老会のテーマについては、小冊子『光水（旅行）漫録』と個人雑誌『躬行者』の両方で取り扱われている。しかし、『光水（旅行）漫録』の中に書かれた内容は、時系列的に『躬行者』の内容と被っていない。同時に『躬行者』の記事の中で、『光水（旅行）漫録』に言及や引用をしているものはない。さらに、『光水（旅行）漫録』の他のテーマについても、『躬行者』には言及や引用がない。

このように小冊子『光水（旅行）漫録』は、その内容において、個人雑誌『躬行者』とは別個の久野庄太郎の著作だと考えられる。したがって、実際に扱われたテーマにそって、丁寧に双方の資料に書かれた事実と、その内容を精査する必要がある。

7. おわりに

本稿は、『人間文化研究』第37号の拙稿で明らかにした久野庄太郎の愛知臨海工業地帯の誘致や愛知海道（第二東海道）の建設推進活動の前に、久野がどのような状況にあり何をしていたのかを先行研究や、今回、発掘された一次資料である『光水（旅行）漫録』を手がかりに考察した。

考察の結果、1954年に破産してから1961年に免責になるまでの期間は、久野にとって空白の期間ではなかったことが判明した。まず、今日でこそ久野が「愛知用水の生みの親」や「愛知用水の久野庄太郎」と顕彰されているものの、一時期、愛知用水の建設推進運動から外されていたことを確認した。その時期は、空白期間とされてきたが、2005年に浜島辰雄が『愛知用水と不老会』を著す中で、久野の個人雑誌『躬行者』の記事とみずからの体験をもとに、その後の久野の活躍を明らかにした。その浜島の記述をふまえた上で本稿は、久野が西田天香の一燈園に隠栖することによって悟りを得て再起を誓い、西田とのかかわりの中で『光水（旅行）漫録』という小冊子が生まれたことを明らかにした。

久野は、愛知用水の建設推進運動から追放された後、一燈園への隠栖による内省の時期をへて、愛知用水はつくるだけでは「駄目」で、それを「保全する必要と仕方」が大切であるとの「大乘愛知用水観」に達するのである。その目的のために、つまり農民の負担の軽減と用水の多目的利用するために久野が必要であると考えたのが、愛知臨海工業地帯の誘致、三町合併、佐布里池の建設推進などであった。そのために活用されたのが『光水（旅行）漫録』であった。

存在が確認されている『光水（旅行）漫録』は、16冊のB6、A5あるいはB5判の冊子で、大きく4つのテーマに分類される。久野の「大乘愛知用水観」にもとづく愛知臨海工業地帯の誘致が中心テーマであるが、他にも、農業開発地域の視察報告、愛知用水への提言、具体的には地域住民の人心開発や愛知用水公団や愛知用水土地改良区への提言、受益農民向けの営農方法の改善、そして、久野が新たに立ち上げた献体団体である不老会の紹介などが語られた。これらの『光水（旅行）漫録』で語られたのは、久野の内省と農業開発の枠をこえた地域総合開発観の深化であった。

小冊子『光水（旅行）漫録』と個人雑誌『躬行者』の内容について比較検討したが、全く異なる資料であることが判明した。愛知臨海工業地帯の誘致や不老会については、両方の資料の中で語られたが、その内容は重複しない。実際に扱われたテーマにそって、それぞれの資料に書かれた事実関係と、その内容を精査する必要がある。

浜島は『光水（旅行）漫録』について、愛知用水のあとのプロジェクト探しの旅が、執筆のきっかけであるとのべているが、実際は、久野が愛知用水土地改良区などの関係者に向けて、愛知用水の将来の問題の解決のために、日本各地の農業開発地域を参考として視察したことがきつ

かけであった。

これまでのべてきた 1954 年の久野の破産から一燈園への隠栖、『光水（旅行）漫録』の発行、1961 年の破産の免責にいたる経験が、その後の『躬行者』の発行や、愛知海道（第二東海道）の建設推進への伏線となっていくのである。つまり、今まで言われてきた「愛知用水の久野庄太郎」から大きく「地域総合開発の久野庄太郎」に舵を切ったのが、この空白とされてきた期間であった。

残された課題をのべる。久野の地域総合開発思想を明らかにするためには、『光水（旅行）漫録』であつかわれたテーマの内容と、久野のその後の活動との関連性についての検討と分析が必要である。本稿では『光水（旅行）漫録』に関して、久野と一燈園とのかかわりや出版された経緯などを明らかにすることができた。しかしながら、全体像の解明にはいたらず、16 の小冊子を 4 つのテーマとその他に分類して、概要をのべることしかできなかった。『光水（旅行）漫録』を詳細に検討するためには、他の史資料との照合や『躬行者』との関係性をふまえた分析が必要である。

8. 謝辞

本稿は、久野庄太郎研究の意義を認めていただいた遺族の久野格彦氏のご厚意なしには公にすることができなかった。また、その存在とタイトルのいくつかは知られていたが詳細が不明であった小冊子『光水（旅行）漫録』の実物を浜島辰雄の遺品の中から発見した郷土史家の茶谷和夫氏の熱意と、筆者に供覧していただいた浜島辰雄の遺族の浜島十志雄氏のご厚意なしには成り立たなかった。最後に、久野庄太郎の一燈園とのかかわりについて一燈園資料館「香倉院」の宮田昌夫氏と藤田民子氏に資料調査などでお世話になった。特に記して謝意を表明したい。

参考文献

- 愛知用水土地改良区、1956、『愛知用水だより第 1 号』、昭和 31 年 12 月 10 日発行、愛知用水土地改良区
- 愛知・豊川用水振興協会、2022、『あいとよ協会だより No.18』、愛知・豊川用水振興協会
- 愛知用水公団、愛知県編、1969a、『愛知用水史』、愛知用水公団、愛知県
- 愛知用水公団、愛知県編、1969b、『愛知用水史（資料編）』、愛知用水公団、愛知県
- 愛知用水土地改良区編、2002、『愛知用水土地改良区五十年の歩み』、愛知用水土地改良区
- 愛知用水土地改良区、2021、「愛知用水と水源の森・愛知用水通水 60 周年記念イベントの開催」、『愛知用水だより No.92』、愛知用水土地改良区
- 愛知用水通水 60 周年記念事業実行委員会編、2021、『愛知用水を知ろう』、水資源機構愛知用水総合事務所
- 「愛知用水を作った男達」展実行委員会、2008、『記録「愛知用水を作った男達」展 2008 年 1 月 6 日～2 月 29 日開催』、「愛知用水を作った男達」展実行委員会
- 安城市歴史博物館編、1998、『日本デンマークの姿～大正・昭和の農村振興～』、安城市歴史博物館
- 不老会、1997、『月刊不老』、第 415 号、「名誉理事長、故久野庄太郎様 追悼特集号」、1997 年 6 月、不老会

- 不老会、2021、『不老』、第588号、「令和3年（2021年）夏季号」、不老会
- 浜島辰雄、1988、「まえがき」、久野庄太郎、『躬行者 総集編』、交友社
- 浜島辰雄編著、2005、『愛知用水と不老会－用水建設に命をかけた久野庄太郎と仲間たち』、不老会創立四十周年記念事業推進委員会 不老会
- 久田健吉、2020、『大欲の菩薩堂に生き、哲学者として生きた愛知用水の父 久野庄太郎－知多の哲学者シリーズ⑦』、ほっとブックス新栄
- 一燈園、1956、『光』、427号、1956年8月、久野庄太郎、「光水旅行漫録」、pp.33-35.を収録
- 一燈園、1968、『光』、569号、1968年6月、久野庄太郎、「終生難忘」 pp.11-15.を収録
- 一燈園、出版年不明 a、『一燈園光泉林』、A4 両面刷パンフレット、一燈園
- 一燈園、出版年不明 b、『西田天香という人』、A4 三つ切り両面刷パンフレット、一燈園
- 久野庄太郎、1956a、『光水旅行漫録 東奔歌日記』、一燈園印刷部
- 久野庄太郎、1956b、『光水旅行漫録 天香さん御案内の弁』、一燈園印刷部
- 久野庄太郎、1956c、『光水旅行漫録 愛知用水第一回総代さんへ捧ぐ』、一燈園印刷部、本体部分は浜島辰雄が執筆した旨の記載がある。
- 久野庄太郎、1956d、『光水旅行漫録 愛知用水公団設立満一ヵ年に際して』、一燈園印刷部
- 久野庄太郎、1956e、『光水旅行漫録 工業用水編・酉の新年』、一燈園印刷部
- 久野庄太郎、1957a、『光水（旅行）漫録 高潮防潮堤をつくりましょう』、不明、未入手
- 久野庄太郎、1957b、『光水旅行漫録 我がためとこの世のためとの愛知用水』、不明、奥付ページのみ欠落
- 久野庄太郎、1958、『光水漫録 第八編 愛知用水と臨海工業』、交友社
- 久野庄太郎、1959a、『光水漫録 第九編 臨海工業と三町合併』、刈谷謄写印刷所
- 久野庄太郎、1959b、『光水漫録 第十編 愛知用水といね』、交友社
- 久野庄太郎、1960a、『光水漫録 第十一編 佐布里池をつくりましょう』、交友社
- 久野庄太郎、1960b、『光水漫録 第十二編 愛知用水といね（その2）』、交友社
- 久野庄太郎、1961、『光水漫録 第十二編 愛知用水復元利用その一』、記載なし
- 久野庄太郎、1962、『光水漫録 第十二編 愛知用水と不老会』、三祐株式会社社会事業部発行、交友社印刷
- 久野庄太郎、1963a、『躬行者』、第6号、1963年3月発行、愛泉館
- 久野庄太郎、1963b、『躬行者』、第8号、1963年5月発行、愛泉館
- 久野庄太郎、1966a、『躬行者』、第44号、1966年5月発行、愛泉館
- 久野庄太郎、1966b、『躬行者』、第48号、1966年10月発行、愛泉館
- 久野庄太郎、1968a、『躬行者』、第66号、1968年4月発行、愛泉館
- 久野庄太郎、1968b、『躬行者』、第67号、1968年5月発行、愛泉館
- 久野庄太郎、1968c、『躬行者』、第68号、1968年6月発行、愛泉館
- 久野庄太郎、1968d、『躬行者』、第69号、1968年7月発行、愛泉館
- 久野庄太郎、1968e、『躬行者』、第70号、1968年8月発行、愛泉館
- 久野庄太郎、1969、『光水漫録 第十二編 知多工業団地を作りましょう』、久野庄太郎、幅印刷

- 久野庄太郎、1970、『躬行者』、第91号、1970年5月発行、愛泉館
- 久野庄太郎、1987、『第三愛知用水計画 久野庄太郎』、記載なし
- 久野庄太郎、1988、『躬行者総集編』、交友社、(『躬行者』創刊号から第100号までを合本製本したもの。浜島辰雄の「まえがき」4頁つき。)
- D.E.リリエンスール、和田小六訳、1949、『TVAー民主主義は進展する』、岩波書店
- 宮本憲一、1973、『地域開発はこれでよいか』、岩波書店
- 宮田昌明、2008、『西田天香ーこの心この身このくらしー』、ミネルヴァ書房
- ミツカン水の文化センター、2010、『水の文化 特集「愛知用水50年」 水の文化 October 2010 No.36』
- 溝口三郎編著、1948、『雨邨水利史談』、雄鶏社
- 水資源機構、2021、「特集中部を支える木曽川水系 水資源開発と管理の足跡」、『水とともに 2021 冬号』、
- NHK プロジェクトX取材班編、2002、「命の川暴れ川を制圧せよ 日本最大 愛知用水13年のドラマ」、『プロジェクトX 挑戦者たち 15 技術者魂よ、永遠なれ』、日本放送出版会、pp.65-116.
- 西田天香、1995、『懺悔の生活（特装版）』、春秋社、初版は、1921
- 岡田洋司、1992、『ある農村振興の軌跡「日本デンマーク」に生きた人々』、農山漁村文化協会
- 岡田洋司、2010、『農本主義者山崎延吉“皇国”と地域振興』、未知谷
- 酒井正三郎編、1967、『愛知用水と地域開発』、東洋経済新報社
- 柴田英知、2022、「久野庄太郎の地域総合開発構想における愛知用水と愛知海道（第二東海道）の関係性ー個人雑誌『躬行者』の記述を手がかりとしてー」、名古屋市立大学大学院、『人間文化研究』、第37号、pp.49-87.
- 杉浦民平編、1970、『ひとすじの道』、現代記録文学全集 13、筑摩書房、久野庄太郎、「愛知用水を築くー手弁当人生ー」、pp.265-305.
- 高崎哲郎、2010、『水の思想土の理想 世紀の大事業愛知用水』、鹿島出版会
- 豊田雄二郎、2021、「社説 流れる水は腐らない 週のはじめに考える」、中日新聞（朝刊）、2021年6月13日、不老会、2022、p.6.に複写として転載されている。
- 筒井栄太郎編著、1969、『手弁当人生ー愛知用水と久野庄太郎』、黎明書房
- 福島達夫、1992、「愛知用水を発想した人物群像」、知多半島研究所、『知多半島の歴史と現在 NO.4』、校倉書房、p 224-242

